

未来の担い手たちのために

学校と地域は出会い、手を取り合う

# キャリア教育 ガイドブック

Career Education  
Guidebook

— Stories —

物語編

経済産業省

【発行・編集】  
経済産業省

【制作】  
地域自律・民間活用型キャリア教育プロジェクト事務局  
NPO法人 アスクネット

【協力】  
28地域の民間コーディネーター

# キャリア教育

## ガイドブック 物語編

Career Education Guidebook

### はじめに

本誌の読み方

4

### 物語 一 佐賀市立神野小学校(佐賀県)

販売体験を通して

「人とのつながり」を学ぶ

子どもたちに芽生えたキッズマートの種

6

キャリア教育から生まれたもう一つの物語

試行錯誤から生まれた鳳雛塾と教師たちの「絆」

10

みんなの力がつになった！

キャリア教育の足跡

11

子ども・教師・保護者・企業…この教育からあふれ出た

みんなの声

12

●授業実施スケジュール

14

### 物語 四 大館市立釈迦内小学校・第二中学校(秋田県)

小学校・中学校連携の

キャリア教育を模索

キャリア教育で学校が変わる

36

キャリア教育から生まれたもう一つの物語

偶然の出会いがきっかけで教師たちを変えていくキャリア教育

40

アイデアと工夫がいっぱい

キャリア教育の足跡

41

子ども・教師・保護者・企業…この教育からあふれ出た

みんなの声

42

●授業実施スケジュール

44

### 物語 五 瀬戸市立祖東中学校・本山中学校(愛知県)

職場体験で

自分の殻を破る子どもたち

市民も協力！地域密着型キャリア教育

46

キャリア教育から生まれたもう一つの物語

瀬戸焼の製作&販売で「商業」体験

50

本山中学校の「もとやま工房二〇〇八」

こんなのできた！

51

キャリア教育の足跡

子ども・教師・保護者・企業…この教育からあふれ出た

52

みんなの声

54

●授業実施スケジュール

54

### 物語 一一 堺市立西陶器小学校(大阪府)

自転車企画を通して

「なぜ」「どうしたら」を育む

教師生活三十年 ペテラン教諭の挑戦

16

キャリア教育から生まれたもう一つの物語

学生・企業・コーディネーター それぞれの「チーム西陶器」

20

自主性のあられ

キャリア教育の足跡

21

子ども・教師・保護者・企業…この教育からあふれ出た

みんなの声

22

●授業実施スケジュール

24

### 物語 一二 札幌市立駒岡小学校・福住小学校(北海道)

学校と地域の

「資源」を活かし育む総合力

キャリア教育による授業への「意味づけ」

26

キャリア教育から生まれたもう一つの物語

子どもたちの「幸せ」とは何か 突き詰めた先に見えた教科の授業

30

みんなつながっている

キャリア教育の足跡

31

子ども・教師・保護者・企業…この教育からあふれ出た

みんなの声

32

●授業実施スケジュール

34

### 物語 六 渋谷区立鉢山中学校・世田谷区立砧中学校(東京都)

雑誌制作という仕事体験から見えた

「働く意味」

情報コミュニケーションを学ぶ

56

キャリア教育から生まれたもう一つの物語

経営者として、働く大人の「人」として 子どもたちに今、残せるものは、

60

制作への思い高まる

キャリア教育の足跡

61

子ども・教師・保護者・企業…この教育からあふれ出た

みんなの声

62

●授業実施スケジュール

64

### 物語 七 岩手県立大東高等学校・宮古商業高等学校(岩手県)

地域を知り、

自らの未来を見つめる

社会の一員であることの自覚

66

キャリア教育から生まれたもう一つの物語

子どもたちを地域で育てていく郷土への愛着がエネルギー

70

地元の現状を実感

キャリア教育の足跡

71

子ども・教師・保護者・企業…この教育からあふれ出た

みんなの声

72

●授業実施スケジュール

74

「参考資料」学校・産業界・地域による「一体的なキャリア教育の推進」

76



# 本誌の読み方

## 全国各地のキャリア教育物語

本誌で取り上げた「七つのストーリー」は、平成十七年度から十九年度の三年間経済産業省委託事業「地域自律・民間活用型キャリア教育プロジェクト」において各地で行われたキャリア教育の物語です。取材班は全国各地に飛び、実際にそのドラマを目の当たりにしながら本誌を作っていました。

キャリア教育にはドラマがあります。子どもたちが笑い、学校の枠を飛び出して走り回り、時には自分の意見を泣きながら主張しています。大人たちも時には職業や立場を超えて意見を交わし、汗を流して準備をしています。子どもたちから元気をもらっています。

「たまたまうまくいったところを取り上げていただけなんだろう」と思われてしまったとしたら、大変残念です。全国二十八カ所の小・中・高等学校で、約三万五千人の子ども

たちが体験したキャリア教育。すべての学校で、ささやかだけれど尊いドラマがあったのです。本誌ではその中から「カリキュラムの違い」「小中高」「地域性の違い」などを基準に選んだ七地域のキャリア教育をご紹介します。

キャリア教育を通してさまざまなことを感じ、学んだ彼らがどんな大人になるのか。その答えが出るのももう少し後のことになるでしょう。しかしキャリア教育の現場を垣間見ただけのことから、その影響力や可能性を想像していただけるかもしれません。

なお本誌でキャリア教育の実践に興味をお持ちになった方は、ぜひ「キャリア教育ガイドブック実践編」をお読みください。キャリア教育のプランニングから実践のポイントまでご理解いただけるようになっています。

## キャリア教育から生まれた 7 STORIES

### 7つのストーリーマップ ～キャリア教育の教育課程との連動～

本誌で取り上げた7地域のキャリア教育が、学校で教育課程の中でどんな位置づけになっているのか、表にしてみました。キャリア教育をつくっていく上で参考にしていただければと考えています

	教科の授業を活用する	既存の学校イベントを活用する	総合的な学習の時間を活用する	
			外部講師を呼ぶ	校外学習を取り入れる
小学校	物語3 札幌市立駒岡小学校		物語2 堺市立西陶器小学校 物語3 札幌市立福住小学校	物語4 大館市立釈迦内小学校 物語1 佐賀市立神野小学校
中学校		物語6 渋谷区立鉢山中学校 物語5 瀬戸市立祖東中学校 物語6 世田谷区立站中学校		物語4 大館市立第二中学校 物語5 瀬戸市立本山中学校
高等学校	物語7 岩手県立大東高等学校			物語7 岩手県立宮古商業高等学校



# 販売体験を通して「人とのつながり」を学ぶ

## 子どもたちに芽生えたキッズスマートの種

◆◆佐賀市立神野小学校(佐賀県)

日本列島の南、九州の佐賀県佐賀市。この街の小学校では、キャリア教育として出店体験プログラム「キッズスマート」が行われている。NPO法人鳳雛塾を中心に、市や教育委員会、大学生など地域ぐるみで活動をバックアップ。子どもたちがお店をつくり、商品を

仕入れ、駅や商店街で販売。もちろん扱うお金も本物だ。今回、佐賀市立神野小学校の五年生一三七人がキッズスマートを通して「人生初めての仕事」を体験した。

- ◆◆佐賀駅発！ キャリア教育
- ◆◆地球&人にやさしい
- ◆◆キッズスマート

「地球と自然を大切に！」  
「安心、安全、美味しい野菜、たくさんあるけん、来てください！」  
快晴の空の下、佐賀駅には太鼓の音とともに子どもたちの元気なお囃子が響き渡る。いよいよ神野キッズスマートの開店だ。

駅前の仮設店舗には減農薬の野菜や自然派洗剤などが並び、十一時半の開店とともに主婦やお年寄りが集まり始めた。子どもたちは少し緊張しながらも商品を説明したり、見栄えよく並べ替えたりと懸命に動く。中には計算に真剣になりすぎて品物を袋に入れ忘れてしまう子もいた。お客さんがまばらになると、看板

や商品を持って歩き、道行く人に必死にお店をPR。「あれ、私ってこんなに大きな声出たっけ...」。みんなで何度も練習した成果を感じながら、商品が売れるたびに子どもたちの表情は生き生きと変化した。  
「あと一つで完売だ」「お願い！売れますように」。グループ全員が最後の商品の行方を追う。ついに商品がなくなるとみんな飛び上がり、手を叩き合って喜んだ。  
半年前から着々と準備を進め、この日見事なチームワークで成功させた子どもたち。少し前までは「環境」についてほとんど何も知らなかった。おとなしく話が聞けず、挨拶も苦手。そんな彼らが「キッズスマート」に出会い、少しずつ成長していった。



## 環境汚染って？ ECOって？ ゼロ知識からのスタート

- ◆◆自分で見て、聞いて
- ◆◆歩いて、触って...
- ◆◆直に学んだエコロジー

佐賀市から環境ISOに指定されている神野小学校の活動テーマは「くらしと環境」。キッズスマートを通して、環境の大切さを地域に発信していこうというねらいだ。子どもたちはまず1学期に自然体験学習の「環」として地元山に登り、普段の生活水と山の湧き水の水質調査を実施。測

度計で大きく異なる透明度の数値に驚き、環境汚染の実態を目の当たりにした。

二期には「五人七軒ずつ近所の家庭を訪問し、インタビューを実施。「環境にやさしいどんな物がほしいか」を聞いてもらった。「頑張っ！」「絶対行くよ」という温かい励まし声に地域の人のつながりを実感した子どもたち。何よりも自分の足で行き、直接聞くことが、大きな自信となった。

「環境」がテーマとあつて、商品は材料や質に着目。自然派洗剤や無添加のお菓子、

野菜は鮮度にこだわり、地元農家の協力を得て販売体験当日の朝に子どもたちが収穫する。「うわあ、ふとカー！」「みずみずしい！子どもがこんなことを言うなんて...」。初めて体験する農作業にみんな大はしゃぎ。畑の土の匂い、根っこびっしりの大根、葉の裏で動く青虫...。「新鮮」を体いっぱい感じた後、農家のおじさんに減農薬野菜が体にいいことを教わり、宣伝用に言句メモする。こうして子どもたちは様々な感覚を通して、リアルに環境への意識を深めていった。





## 会社づくりで子どもたちの意外な能力を知る

◆◆「あの子と働きたい！」  
◆◆教師も感心する  
◆◆子どもたちの観察力

お店を出すために、子どもたちは会社を設立し、それぞれ社長(店長)、宣伝、仕入れ、会計、販売といった役割を担う。キッズマートの活動の間は、各グループに分かれてメンバーと一緒に活動する。

神野小学校のグループ編成はとてもユニーク。「リーダーシップが取れる子を育てたい」という教師たちの思いから、グループを作る前に、社長を推薦で決める。

まず子どもたちは、クラスの中で誰がリーダーなら積極的に協力できるかを理由とともに用紙に書く。そこで名前が上がってくるのは、成績の良い子やいつも目立っている子ではなく、リーダーの素質はあるのに恥ずかしがり屋のために普段、力を発揮できないような子たちだという。教師がぜひリーダーを任せたいと望む子と子どもたちが選ぶ子が不思議と一致するのだ。

「本当に信頼できるのは誰か、子どもたちは普段からよく見て知っているんです」と教師も感心しきり。

リーダーに選ばれたKさんは「自分が選ばれてびっくり。でもすごく嬉しかった」と恥ずかしそうに話す。普段はもの静かな彼女だが、選ばれてからは活発にとってもうまくみんなを引っ張っているという。本人が

一番、自分の意外な力に驚いているようだ。

こうして選ばれたリーダーのもとに名前を書いたメンバーが集まりグループを結成。その後、各係の資質にふさわしい人をみんなて話し合つて決めていく。もちろん立候補もあるが、基本的に他薦。予想外の役割を任されて最初は不安がついた子も、自分が意外と向いていることを発見したり、やはり苦手だと再認識したり…。それぞれ悩みながらも任務をこなしていくことで徐々に自信をつけていった。



## 子どもたちの心に根づいた「キッズマートの種」

◆◆「人はなぜ働くのだろうか？」  
◆◆経験して変化した  
◆◆子どもたちの意識

キッズマートを通して、子どもたちは自分で責任をもつことやみんなで協力することの大切さを学ぶ。「どうすればいいと思う?」は活動中、あちこちで飛び交うキーワード。教師やコーディネーターから子どもたちへ、リーダーから仲間へ、問題やトラブルが発生してもすぐに答えを教えず、あらゆる方向からヒントを出して「自分で考える」力を養う。ときには、グループ内の意見対立や活動にうまく馴染めない子も。その度にリー

ダーを中心に話し合いながら問題を解決していった。

そして迎えた販売体験当日。子どもたちは大声を張り上げ、めいっばい動いて、終わる頃にはもうヘトヘト。勇気を出して声をかけてもそっけない態度をされ、働くことやお金をもらうことの厳しさを実感した。一方で、お客さんからの「ありがとう」の一言がこんなに嬉しいものなんだと気づく。

「人はどうして働くと思う?」  
事前学習で教師が聞いたこの質問に、当初、多くの子どもたちが「お金のため」と答えていた。しかし販売体験が終わる頃になると、この答えが次第にお金以外のものに

変わってくるという。一度体験するぐらいではさきりとは分からないのかもしれないが、お客さんの笑顔や言葉、応援してくれる地域の人たちの優しさに触れ、商品が売れる、お金が入ってくる喜び以上のものを子どもたちは感じ取ったようだ。

三学期には活動の成果を四年生に向けて思い思いに発表。「来年は自分たちの番」という意識が順に次の学年へと受け継がれていく。キッズマートはこうした学年間の縦のつながりにも役買っている。

神野小学校の卒業アルバムには、修学旅行よりもキッズマートについての記述が多く残るといふ。販売体験を通して学んだ、人

とのつながりや責任を持つことの大切さ。そしてちよびり垣間見た社会のしくみ。子どもたちのココロに芽生えた小さな「キッズマートの種」はこれからどんな成長を見せるのだろうか。





地球&人にやさしい  
エコ商品いろいろ

### 減農薬野菜&無添加洗剤

野菜を売るグループは、キッズマート当日の朝、地元農家で減農薬野菜を収穫。太陽の恵みをいっぱい浴びた新鮮な野菜は、お客さんにも大好評。日用品グループは洗剤やシャンプーを販売。環境や肌にやさしい無添加のものにこだわった。



出店の思いを  
しっかり説明

### 事業計画書&借用書

商品を仕入れるため、子どもたちは各グループで会社の経営方針やいくら必要か、なぜ必要か、利益はどれくらいかなどをまとめ、銀行役(鳳雛塾)に説明する。返済期日を記入した借用書もしっかり提出。

みんなの力が1つになった!

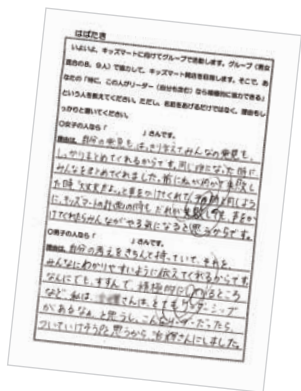
## キャリア教育 の足跡

「くらしと環境」がテーマの『神野小キッズマート』。こだわりの販売商品や子どもたちの手作り作品など個性豊かなアイテムが揃った。

### グループ作りの「核」

#### 店長推薦用紙

神野小学校ではグループ(会社)をつくる前にリーダーを選ぶ。誰がリーダーなら積極的に協力できるかを男女1名ずつ挙げ、その理由とともに記入して提出。理由欄には日々のエピソードから感じた子どもたちの素直な気持ちがあふれている。



元気にお店をPR!

#### POP広告

値札やポスター、看板は子どもたちの手作り。カラフルなペンや色紙を使って「環境にやさしい」「未来の地球を考える」など、各店舗の思いやPRを自由に書いた。地元ケーブルTV出演での宣伝でも利用。



キャリア教育から生まれたもう1つの物語

## 試行錯誤から生まれた 鳳雛塾と教師たちの「絆」

キッズマート導入の難関  
「教育」と「産業」の違い

「学校の外で、本物のお金を使って、本物の商品を売る」。

キッズマートは、学校だけでは体験できない場を子どもたちに提供したいという鳳雛塾スタッフの思いから生まれた。

人とのつながりや自分で考える力など、総合的な学習の時間に適した多くのことが学べる販売教育だが、学校に提案するときに一つの大きな壁にあたる。それは、販売体験の中の「お金を稼ぐ」「社長を決める」といった活動の一部分だけを見て、躊躇する学校が多いということ。授業の中でお金を使うことや利益、儲けといった概念はタブー視されているからだ。そうかといってこの部分を簡単に譲ってしまうのではカリキュラム自体が成り立たない。

そこで、教師たちと時間をかけて話し合い、販売体験、キャリア教育の目的をきちんと分かつてもらうことでお互い納得できるカリキュラムを作ることが必要になる。

「教育と産業とはもともとと考えが違うもの。ここをうまく協調できるかが、キッズマートが成功のカギなんです」と鳳雛塾事務局長の横尾さんは言う。今年で三回目を迎えた神野小学校も例外ではなく、導入初年度は鳳雛塾にとっても、教師たちにとっても日々試行錯誤の連続だった。

「先生に理解してもらおうこと」  
「これなしでは成り立たない」

「神野小キッズマートにこの人あり」とい

われる人がいる。導入初年度から二年間、学年主任として活動に携わってきた馬渡広子教諭だ。

キッズマートを行う一番の目的は「環境教育」という馬渡教諭と、「キャリア教育(佐賀モデルでは起業家教育)」をもとに産業界の特徴を組み入れたいという鳳雛塾。毎日、授業が終わると双方の間で、長時間のミーティングが行われた。話し合いをもとにして鳳雛塾が教材を作り、教師たちが綿密にチェック。やりにくいと感じたらその都度、鳳雛塾に変更を依頼する。毎晩のように遅くまで明かりが灯る職員室。「まだ帰らんとや!」と教頭が心配するほどだった。

「三組のSさん、こないない考えを持ってらんですよ」「二組のN君がゴソゴソと地道に頑張ってる」。五年生担任の会議では、活動で子どもたちの新たな個性を発見するたびに、話題が上がった。全クラスが合同で行うことで、教師同士の間でも「連帯感」が生まれていった。

「本当に苦労したけど、みんなで一緒に作りあげていく楽しさがありました。それにやっただけのことにはある。子どもたちの生命さ、変わる姿を間近で見られますから(馬渡教諭)。

「馬渡先生たちとのやりとりは未だに忘れられません。それだけみんな真剣だったんです」(横尾さん)。

導入時に築かれた馬渡教諭と鳳雛塾との信頼関係は、神野小学校のその後のキッズマートにしっかりと活かされている。





## 教師・保護者・支援者の声



## 子どもたちの声



キッズマートを通して体験した「人生で初めての仕事」。思った以上に楽しくもあり、厳しくもあったこの体験は、さまざまなカタチの種となって子どもたちの心に蒔かれた。

エコマークについて興味をもち、地球に優しいものは何かと考えるようになりました。  
(保護者)

子どもがキッズマートについていつも楽しそうに話してくれます。話題の中心になって家族内のコミュニケーションが深まりました。  
(保護者)

子どもの金銭感覚がより現実的になったように思います。以前は「好きだから買う」だったのが、今は値段を見てから買うようになりました。  
(保護者)

家でお父さんの仕事について色々聞くようになりました。仕事の大変さや親の大変さが分かってきたようです。  
(保護者)

売る立場を経験することで、商品＝「物」ときちんと向かい合うことの大切さを知ってくれたらと思います。物を大事にする、工夫して一生懸命使うことが結果的にエコにつながるんです。  
(佐賀市エコプラザ：担当者)

最初は「大変そうだな…」というのが正直な気持ちでした。でも活動を進めるうち、子どもたちがきちんと話を聞き、協力し合うようになり、やるだけのことはあると実感しました。  
(神野小学校：河村峰子教諭)

キッズマートをして仕事の大変さを知り、いつもがんばっているお父さんやお母さんに感謝しないとイケないと思いました。

最初あまり声が出なくて、挨拶もすすんで出来なかったけど、自然に知らない人にも挨拶ができるようになりました。

キッズマートでお客さんへの接し方などが分かりました。お辞儀の仕方や相手の目を見て話すことが大切だということが分かりました。

初めは全然協力できなかったのに、完売したときは男女関係なく手をたたき合って喜びました。最初と比べてすごく変わったんだなと実感しました。

キッズマートで学んだことは「働くことの大変さ」と「グループの協力」です。今年経験したことを来年の5年生にアドバイスをしたいです。



# 授業実施スケジュール

## 授業内容

## 授業実施ポイント

事前学習 [約20時間]

### step 1 基礎知識 教材学習

オリエンテーションでプログラムの概要を説明した後、お店のこと、商品のこと、値段のことなどの販売に関するイロハを教材(ケース教材)を使って学習。  
step 2のアンケートで配るためのポスターやチラシも作成する。

### step 2 地域のニーズを知る 意識調査

地元商店街や地域のお宅を訪問し、「どんな商品が売れているか」「買いたいか」「売りたい商品のニーズがあるか」などの聞き取り調査(アンケート)を実施。

### step 3 役割を決めよう 会社設立

六、七人でグループ(会社)をつくり、売りたい商品やなつてみたい役割(社長、宣伝、仕入れ、会計、販売)などを決める。ここでは会社名や経営方針などもメンバー全員で決定。

### step 4 何を売る？ 商品決定

仕入れ先の協力企業からの商品リストをもとにお客さんのニーズに合った商品を選ぶ。仕入れの上限枠(原則二万円…ただし学校に合わせて変更)の範囲内で仕入れ商品の種類や個数を決定し、仕入れリストを作成。その後、仕入れ価格、経費、当日のワゴン代や買い物袋代、そして利益などを考えて商品の販売価格を決定する。

### step 5 キッズマートをPRする 宣伝活動

お客さんにお店に買に来てもらうための広告や宣伝活動を行う。具体的にはテレビ出演や地域のイベントへの参加など、たくさんの人にキッズマートの宣伝を行う。

### step 6 資金を調達しよう 事業計画書作成&借り入れ

実際の商品を仕入れるために事業計画書を作成し、銀行役(起業家銀行を設置)からお金を借りる。この時はもちろん、自分たちのお店の事業計画をきちんと銀行役に口頭で説明。借入書には返済期日を記入して提出する。

### step 7 いよいよ本番 出店販売活動

直前準備として商品を搬入・納品したら値札をつけ、袋詰めを行う。当日使う飾りやPOPを作る。開会式と閉会式の練習を行う。キッズマート当日は地元商店街や駅構内で実際の現金を使って出店販売活動を行う。売り方、看板・POPによる呼び込みなど、さまざまな工夫を凝らしながら商品を販売。それぞれの会社が協力し合って全店完売を目指す。



### step 8 まとめ ふりかえり

会社の売り上げを自分たちで計算し、売り上げの中から銀行から借りていたお金を返済。利益や売り上げのデータをもとに出店体験活動についてふりかえり、利益の使い道も教師と一緒に考えてみる。キッズマートに協力してくれた人たちへの感謝の気持ちを手紙などで伝え、次の学年(四年生)にキッズマートの内容や成果について報告を行う。

キッズマートは子どもたちの自ら考え、自ら学び、自ら行動するという「生きる力」と「人となつながら力」を育むことがねらい。各校のテーマやスケジュールに合わせて内容、時間数を変え、特色ある独自のカリキュラムを作成することができる。

●より具体的な話を聞くために販売や仕事をしている社会人を外部講師として授業に招く。

●ここでのポスター・チラシ作成はstep 5で作る本番用の練習を兼ねる。全員の作品案をまとめて品評会を行い、最終的に数点選出。

事前準備すること  
外部講師はテーマが「環境」ならば市の環境施設スタッフ、「地域の活性化」ならば商店主など、各校のテーマに合わせて専門的な話を聞ける人材の候補を調べておく。

●一人五〜七軒ずつ自分の足で近所の家を訪問。一人で行きづらい場合には複数で行つてもよいが、人数分以上の軒数は必ず行かせる。

事前準備すること  
保護者参観日など大人と接する機会があれば、インタビューの練習を行つておく。



●社長、宣伝、仕入れ、会計、販売のそれぞれの役割と必要な資質を教えた上でグループ全員で話し合つてそれぞれの役割にふさわしい人を選ばせる。

●キッズマートのテーマに合った商品にするよう子どもたちに意識させる。

●商品が決まったら、「こんなお店にしたい」という思いをグループごとに発表させる。

●「他店がどれぐらいの値段で売っているのか」や「お客さんが買いたくない値段か」などもきちんと考えて販売価格を決定させる。

●納品までの流れは、神野小学校の場合、NPO法人鳳雛塾が担当。

仕入れリストをもとに発注書を作成(記入ミス、予算オーバーに注意)仕入れ先へ発注→納品日確定の連絡→仕入れ先で商品受け取り(検品)→学校へ納品、搬入

●チラシやポスターも子どもたちの手作りで、特にポスターは「お客さん」という視点から工夫して作成させる。

事前準備すること  
地元ケーブルTVやラジオ会社にポイントメントをとっておく。パレードやお祭りなど宣伝の機会になりそうな地域のイベントを探す。

●経営方針、お金がいくら必要か、利益見込みなどを子どもたちに口頭で説明させ、借入書を書かせることで、販売意欲を高める。同時にお金の大切さを認識させる。

●銀行役はコーディネーターかできれば本物の銀行員がベター。(子どもたちの目線でお金の話をきちんと説明できることが大切)

●販売体験前に挨拶や接客マナーの練習を行う。

●納入時に数量や不良品がないかをしっかりとチェックさせる。

●基本的に子どもたちの自主性を尊重。トラブルがあつても、すぐに答えを教えず、まず自分でどうすればいいかを考えさせる。

●販売体験当日は次の学年(四年生)に見学してもらつて、来年度への意欲につなげる。

事前準備すること  
・納品した商品は体育館など、置いておく場所を確保する。  
・生ものは冷蔵庫に入れる。  
・減農薬野菜は鮮度の観点から当日の朝収穫する。事前に協力してくれる地元の農家を探しておく。  
・出店先に子どもたちが挨拶回りしておく。

●子どもたちに「キッズマートを終えて」のテーマで作文を書かせる。

●近くの協力企業には子どもたちが直接手紙を持参し、フェイス・ツー・フェイスで感謝の気持ちを伝え、多くの人の協力で実施できたことを認識させる。

体験学習 [約30時間]

事後学習 [約10時間]



# 自転車企画を通し「なぜ」「どうしたら」を育む

## 教師生活三十年 ベテラン教諭の挑戦 ◆◆ 堺市立西陶器小学校(大阪府)

キャリア教育実施一年目の発表会。担当の清水順子教諭は、緊張で足が震えていた。ズラリと並んだ審査委員を前に、自分たちの企画した自転車を発表する子どもたち。相手に分かりやすいように、まっすぐ前を見てゆっくり、ポイントを押さえて説明をす

る。審査委員からの質問にも、物怖じせず即返答。気づかぬうちに、子どもたちはひと回りもふた回りも大きく、立派に成長していた。「ホンマに苦しかった…。でも、ホンマにやってよかった…。教師生活三十年にして最大の喜びと達成感が、涙となって溢れた。



◆◆◆◆ 「自分がやらなきゃ！」  
◆◆◆◆ 誰かにやらされるのではなく  
◆◆◆◆ みずから行動する子どもたち

ある日の昼休み。普段なら校庭で遊び回っている六年二組の子どもたちが、教室にいた。「今から福祉グループの発表を始めます。礼！」この部分は足の不自由な人のことを考え、軽い素材にします！」。この日の五、六時間目はキャリア教育の授業。しかも中間発表会。ほんの数日前までは、何ひとつ準備

できていなかったのに…。これは、「自分がやらねば！」という責任感が子どもたち一人ひとりに芽生えた証だろうか。どのグループも休み時間であることを忘れ、練習や準備に集中している。子どもたちの手には各自、自転車の図や解説を描いた企画書。顔を上げ、大きな声で発表する様子は、ほぼ完璧なように見える。しかし子どもたちは、これで満足しない。他のグループが指し棒を使ったり、企画書に色を塗るなどして発表方法を工夫していれば、すぐ自分のグルー

プに取り入れる。仲間の良い部分を認め、吸収していく子どもたち。まさに清水教諭が求めていた「自主的に活動する」子どもの姿だった。



## 形、結果の見えない教育に、不安を抱えながら…

◆◆◆◆ 「キャリア教育って何やねん!?」  
◆◆◆◆ 半信半疑のまま約三十時間の  
◆◆◆◆ プログラムがスタートした

平成十七年夏。当時六年生の担任だった清水教諭は、校長室に呼ばれた。「それじゃ清水先生、キャリア教育よろしく!」。校長先生からの突然の依頼に、清水教諭は思わず「キャリア!? 何ですかそれ!!」と叫んだ。堺市には世界シェア約八割を占める伝統産業「自転車」がある。戦国時代の鉄砲鍛冶の技術を活かし、自転車部品を製造する産業が栄えたからだ。そこで西陶器小学校は堺市が誇る産業であり、子どもたちにとって身近な自転車を題材にしたキャリア

教育への参加・実施を決意。授業のねらいは「自転車の企画」を通して、ものづくりに対する考え方や思いを知り、子どもに「考える」ことに興味を持たせること。さらに考えを伝え、評価されることで、より思考を深める力を身につける。子どもたちの思考力低下を懸念していた清水教諭にとって、興味深い内容だった。しかし、企画から発表会まで約三十時間。中学進学を控えた大事な時期である六年生にとって、あまりに長過ぎる。しかも前例がないため、子どもへの反応もゴールも想像できない…。不安を抱えたままキャリア教育は始まった。

「K君が素材に着目して質問してきたのに、上手く答えられなかった…。キャリア教育への参加・実施を決意。授業のねらいは「自転車の企画」を通して、ものづくりに対する考え方や思いを知り、子どもに「考える」ことに興味を持たせること。さらに考えを伝え、評価されることで、より思考を深める力を身につける。子どもたちの思考力低下を懸念していた清水教諭にとって、興味深い内容だった。しかし、企画から発表会まで約三十時間。中学進学を控えた大事な時期である六年生にとって、あまりに長過ぎる。しかも前例がないため、子どもへの反応もゴールも想像できない…。不安を抱えたままキャリア教育は始まった。







◆◆◆世の中は変化していた  
◆◆◆変わらないのは学校だけだった  
◆◆◆社会に目を向けた教育をせねば

キャリア教育の授業を始めて、間もない頃。同年代で主婦をしている友人に、キャリア教育について話をすると「そんなとくく知ってるよ」。思いがけない言葉が返ってきた。友人は会計士である夫から、社会や企業を取り巻く現状、そして自分の能力、将来を見失っている人たちの話を常に聞いていたのだ。さらに「私たちの時代は、

就職したら定年まで勤めるのが当たり前だった。でも今は、何が起きるか分からない時代。自分の力を活かして、どんなステップアップしていかん」と。世の中の実情を目の当たりにした清水教諭の目に、子どもたちの顔が浮かんだ。「学校」しか知らない子どもたちは将来、社会で生き抜いていけるのだろうか。壁にぶつかった時、自分の力で這い上がれるのだろうか。子どもたちにあえて厳しい経験をさせることも必要なのではないか。友人との会話から清水教諭は、キャリア教育の重要性にあらためて気づいた。



## 子どもたちをとことん凹ませる。「ここ」からがキャリア教育の本番



◆◆◆企画の甘さと自分の未熟さを  
◆◆◆突きつけられた子どもたち  
◆◆◆「大丈夫。必ず這い上がれる」

「道路走ったら自動車ちやうの?」「何も伝わってこない」。コーディネーターから容赦なく指摘が飛ぶ。その隣で清水教諭は、子どもたちの様子をじつと見つめる。中間発表会では「班ずつ体育館の舞台上上がり、模擬審査員となったコーディネーターやトレーナーを前に、本番同様に自分たちの企画を発表。一方、模擬審査員たちは、企画内容が各班の設定したターゲットの求める要素を満たしているか、分かりやすい説明であるか等の発表態度もチェックする。あえ

て突っ込みを入れることには、理由がある。社会に出れば、大なり小なりぶつかる「課題」。その「課題」を自分なりに咀嚼し、原因と解決策を考え、一歩踏み出す経験を繰り返すことによつて、将来必ず社会で生き抜いていける。そう清水教諭は、授業を重ねるうちに確信していたのだ。とはいえ、時間をかけて考えた企画やのに」と発表後、怒りを抑えられない子。シヨックで放心状態の子などさまざま。そんな中、「早く考え直そう!」と落ち込む仲間を鼓舞する子どもの姿が…。清水教諭はこの様子を見てさらに班で行うことで、子どもたちは互いの弱さを補い合い、班だけでなくクラス全体の向上につながることを実感した。



## キャリア教育は、生き続ける子どもたち、そして教師たちの心の中で…

◆◆◆一つのことをやり抜いた経験が  
◆◆◆自信と達成感をもたらす  
◆◆◆前に踏み出す勇気を与える

堺市で創業へ今も堺市に本社をおく株式会社シマノの協力のもと行われたキャリア教育。彼らからの「君たちをシマノの企画部社員に任命します。未来の自転車は、みんなが考えてや」というミッションと、ものづくりにかけるアツい思いに触れた子どもたちはプレゼンテーションの前に「シマノのオッチャンに絶対見てもらいたい!」という思いを強くしていた。子どもたちは中間発表会での落ち込みをバネに、企画の内容から絵、説明の口調までガリリと変更。プレゼンテーションまでわずか十日。「もつとイイ

ものを」という子どもたちの向上心は日々高まっていた。いよいよ当日。子どもたちは自分たちの企画を審査委員に理解してもらおうとプレゼンテーションシートに「なぜこの自転車を考えたのか」という根拠や使う人のイメージ、それらを裏付けるアンケート結果を提示。さらに企画のポイントとなる部分では、手作りのパットの見本や寸劇を用いて説明。審査員「子どもたちのプレゼンテーションに引き込まれていた。キャリア教育も三年目となった平成十九年度。子どもたちのプレゼンテーションの様子にも表れたように、清水教諭はより教科とつなげた授業を目指して実施してきた。例えば、アンケート結果を明示割合やグラフは算数科。プレゼンテーションで筋道

を立てて説明するための原稿作りは国語科。他にも「誰のために」といった企画のターゲットを考える場面では道徳。他にも理科のてこふりこの原理を使ったり、パソコンで資料を作る等、さまざまな授業とキャリア教育を結びつけた。教科を基盤に活用しながら探求力を培う。清水教諭は、キャリア教育とは「人間の総合力を育む教育」であることを実感した。こうしてキャリア教育を活用し教科を深めた結果、子どもたちの行動にも変化が見られるようになった。算数に苦手意識を持ち、答えだけを求めていた子どもが、今では苦手な部分があつても考えようになった。また、考えることを繰り返し返して何とか答えを出そうとする態度、友達の発言を理解しようとする姿勢が育つ

てきた。「自分の苦手と向き合い、粘り強さを身につけたことは、キャリア教育の大きな成果でした」。これまでの苦労を忘れる程、清水教諭にとつて充実した時間になったようだ。キャリア教育の成果は、学校内だけに留まらない。キャリア教育の面白さを聞きつけた近隣の学校の先生から「ウチの学校でもやってみたいねんけど」と連絡が入るようになった。「わからんことがあたらいつても聞いてな」。清水教諭の声が弾む。キャリア教育に挑戦した日々。子どもたちの成長に何度驚かされ、喜び、涙したか…。清水教諭は今後、キャリア教育を同じ仲間にも広く伝え、サポートする側へ。新たなステージへと踏み出した。

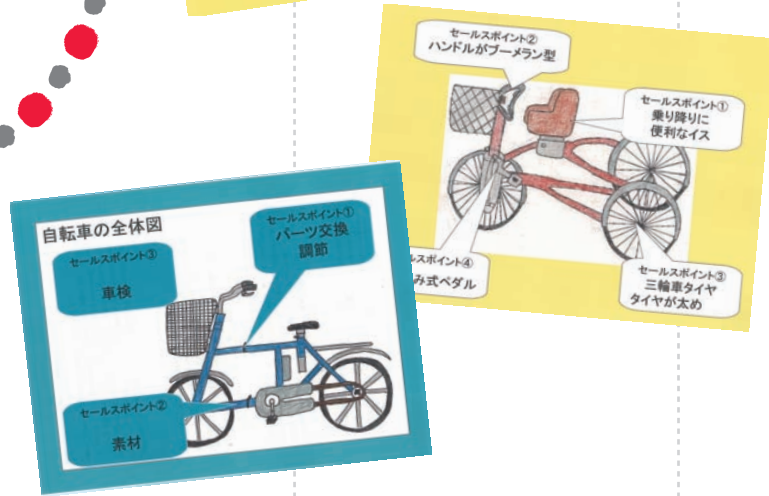
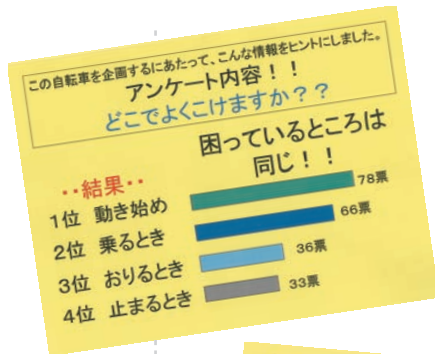


# 自主性のあわれ キャリア教育 の足跡

「自転車企画する」というミッションのもと、考え続けた4か月。子どもたちの創意工夫が詰まった数々のアイテムがうまれた。

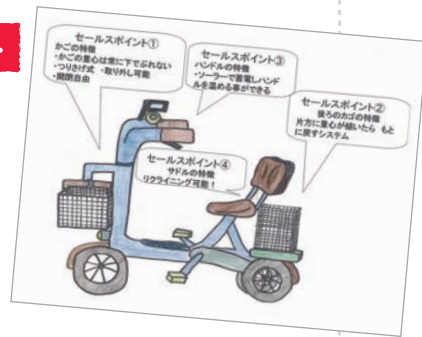
## 企画を盛り立てる 手づくりアイテム

各グループとも自分たちが企画した自転車を、審査員たちがイメージしやすいようさまざまなアイテムを手作り。例えば、足の不自由な方をターゲットに考えた自転車では、万が一ぶつかっても衝撃がやわらぐようにハンドルをブーラン型に。実寸大の見本を作成した(写真上)。子どもたちはアイテムを使って実演をしたり、審査員に実際にアイテムに触れてもらう等しながらプレゼンテーションを行った。



## 考え抜いた企画の集大成 プレゼンテーションシート

プレゼンテーションに向け、企画書はすべてパワーポイントで作成。子どもらしい斬新なアイデア・視点に、教師をはじめとする大人たちは毎回驚かされる。シートには、自転車の全体像からパーツごとの特徴、さらに「自分たちが企画した自転車がなぜ必要か」を裏づけるデータとしてアンケート結果等を入れて企画に説得力を持たせた。



## 絵に表すことで イメージを具体化 自転車のイラスト

企画がかたまると自転車の特性(ポイント)を書き出し、全体像から各パーツまで、絵に表していく。中間発表の段階では、こうした手書きの企画書で発表。大人たちからの指摘やアドバイスを受け、企画を練り直したら、プレゼンテーションシートにまとめていく。



## キャリア教育から生まれたもう1つの物語

# 学生・企業・コーディネーター それぞれの「チーム西陶器」

本授業をコーディネートするNPO法人南大阪地域大学コンソーシアム。南大阪エリアの大学や企業との連携を活かし、キャリア教育への参加・協力を呼びかけた。学生トレーナーは子どもたちにとって何でも相談できる兄姉であり、教師にとっては心強い存在。また(株)シマノの社員は教師、子ども、トレーナーも憧れる「めっちゃカッコいい大人」だ。

「プロ」との出会いで  
磨かれ、羽ばたく学生たち

「今回は私が突っ込み役ということで」「じゃあ僕たちは、練習の様子を見てアドバイスをして」「先生は発表後の子どもたちのフォローをお願いします」。中間発表会を前に教師、コーディネーター、学生トレーナーたちは入念な打ち合わせをしていた。堺市で行われているキャリア教育にはコーディネーターのほか、大学生が授業のサポーターとして参加。授業の進行からワークシート作りまで、教師とタッグを組んで行う。平成十九年度の学生トレーナーは、二人。子どもたちについて、どんな言葉を掛けたら分かりやすく伝わるのか。学生たちは、授業を重ねるごとに自分の未熟さや足りない部分と対峙する。かつて清水教諭はトレーナーが徹夜で作ったプリントを突っぱねたことがある。熱意は認める。しかし子どもの立場から見てもわかりづらいものであれば、「教えるプロ」として遠慮なく言う。学生たちは再び、授業や子どもたちと向き合った。子どもたちが自転車企画づくりというミッションに向かっただけでなく、教師たちは子どもたちの成長が目標。それぞれ立場も役割も違えども、ともに目標に向かってスパイラルを繰り返す。トレーナーが奮闘する様子は、まさに何度も企画を練り直し、ブラッシュアップしていく子どもたちと同じだ。授業に参加し「刺激と仲間と自信をもらいました」とふりかえる二人。企業で働く大人や教師の仕事ぶり、熱意に触れ、学生も働く「意味」を知り、社会への第一歩を踏み出す。

子どもたちに気づかされた  
仕事への誇りと愛情

キャリア教育によって、企業も変わった。自転車の企画づくりに協力した(株)シマノは当初、授業の参画について「社会貢献」と位置付けていた。相手は自転車について何も知らない子ども。社員たちは授業に参加するうち、自転車に関する理解・知識不足を感じた。会社のこと、商品のこと、そして自転車全体のこと。社員は初心に戻り勉強した。「すげえ!」「何でこんなに軽い?」。感想に加え質問も飛び出すようになった子どもたちと接するうち、気づくと授業の組み立てにも参加していた。思いを伝え、反応を受け、次の取り組みを考える。社員も子どもたちと共に成長していた。いつしか活動は「社員教育」の位置づけになり、会社全体の取り組みへと発展した。

こんなエピソードもある。授業二年目。清水教諭も学生トレーナーも、自転車に関する知識の少なさから、子どもたちからの専門的な質問や指導に限界を感じていた。発表会後、企業の担当者の方に思わず「もう一回シマノさんが授業に来てくれたら!」とこぼした清水教諭。すると翌年度、担当者が依頼した授業以外にアドバイスに来てくれたのだ。「えーシマノさん来てくれたんですか!」と清水教諭。「先生、言うてちゃん!」と担当者。通常、授業の導入と発表会しか参加しない企業だが「子どもの学ぶ意欲に応えたい」という思いが、担当者を学校に向かわせた。仕事と共に学校に愛情を注ぐ大人の姿は、とても眩しかった。





教師・保護者・支援者の声

仲間とコンセンサスを取ることや、自分の意見を伝えること、納得いくまで話し合うことは、1つのことをチームで成し遂げる上で非常に重要であることを痛感しました。「教えるプロ」である先生方と30時間過ごす中で、働くことの厳しき、喜びを知りました。  
(学生トレーナー)

トレーナーを体験したことで、物事を順序立てて考え、伝える力がつきました。そして子どもたちの何度も企画を考え直す姿、大勢の前で発表する姿を見るうちに、自分もどんどん失敗して、それをバネにいろんなことにチャレンジしたいと思いました。  
(学生トレーナー)

仕事や自転車について語り、子どもたちと過ごした時間は、教える側の社員にとって「自分と仕事」を考える良い機会になりました。同時にシマノで働いていること、授業に参加できたことに幸せを感じました。  
(授業協力企業：担当者)

「未来の自転車」を企画するのに戸惑う子もいます。しかし多くの子どもたちが自分で考え、仲間と話し合っ、面白い商品を生みだしていくことの醍醐味に没頭している様子が実感できました。  
(授業協力企業：担当者)

発表会ではキチンと賞までつけて下さって、本当にありがたいなと思いました。社会では、すべてが認められるわけではない、甘くないということを経験させていただき、感謝しています。  
(保護者)

(株)シマノの社員の方から直接、ものづくりに対する思いを熱く語っていただくことで、子どもたちの「想像力」「やる気」がより高まりました。歴史ある大企業でありながら、一人ひとりが仕事に対する楽しさや、やりがいを感じながら生き生きと働いておられることを実感。この授業を通して、子どもたちが考え、伝え、さらに考えを深めることの面白さに気づき、1つの課題をやり遂げたという自信とともに、これから活かして欲しいです。また、これは小、中学生に限らず、今回トレーナーとして参加してくれている学生たちにもぜひ伝えたいことでもあります。  
(コーディネーター：木村ゆいさん)

子どもたちの声

この授業を受けてからは、どんなちっぽけなものでも、人が人のために考えて作ったことを知って、やる気が出てきました。

グループ活動は苦手だった。さらに、自分の苦手な意見を伝えるという課題も出てきた。だけどやって見ると意外に楽しかった。みんなと活動するのも大事なあとと思った。

自転車のいい案が浮かばずやんでいたとき、同じチームの友達が助けてくれ、ほくにもこんな友達がいたんだとうれしくなりました。一緒に考えるうちに、考えることがすごく楽しくなりました。

自分の意見をしっかり言って、相手に自分のいいたい事を伝える力。一つの事ばかり考えるのではなく、いろいろな視点で考えるという力。この力を企業に就職したら役立たせたいです。

けっかは最ゆうしゅう賞じゃなかったけど、最後にチームがまとまって、自分の仕事がやりとげられて本当にうれしかったです。



# 授業実施スケジュール

## 授業内容

### step 1 授業の意味を知る 事前学習

児童や生徒の住む地域にはどんな産業があるかを調べ、地域産業に対する興味・関心を促す。西陶器小学校の場合、堺市の歴史を学習する中で、堺市がものづくりの町であることを知り、伝統産業である自転車について調べるようになった。

### step 2 子どもたちの興味・関心を喚起 企業からのミッション

「ものづくり」に関連する企業(あるいは個人)の方を招き、商品の特徴や開発のポイントを説明してもらおう。西陶器小学校では、自転車部品メーカーである(株)シマンの企画室広報部の方を迎え、自転車の特徴や自転車づくりへの思いなど、子どもを引っ張るよう説明。さらに子どもたちに「21世紀の自転車を企画してください」というミッションを与えてもらった。

### step 3 「もの」と社会との関わりを知る 徹底分析

企画する前にテーマとなる「もの」について分析を行う。「もの」と人、「もの」と社会との関係から、環境、社会、健康、福祉、趣味、スポーツ等の視点で分析。最も興味関心のある視点をもって、「もの」との関わりを見つける。また、関連施設がある場合は見学へ。企画のアイデアが膨らむ。

### step 4 深めた思考をカタチにする 企画書作成(個人&グループ)

企画する「もの」の構造を分析し、問題点を抽出。まずは個々で企画書を作成する。次に企画のテーマが同じ者同士でグループとなり、ターゲット、視点、課題をはっきりさせる。グループごとに企画書をまとめる中で、より企画に説得力を出すために、アンケート調査を実施。

### step 5 他との違いを知り、さらなる工夫を凝らす 中間発表・企画の再考

概ね企画がかたまってきたところで、中間チェックのため口頭発表表を行う。各グループの持ち時間の目安は約10分(プレゼンテーション10分、フィードバック)。トレーナーなどからコメントやアドバイスを受け、次回以降に何をすべきかを明確にさせる(自己評価)。また他のグループの企画内容や発表態度をチェックし、意見交換する(相互評価)。



### step 6 役割を認識し、チームワーク力を高める プレゼンテーション準備

中間発表の評価をもとに練習直したら、パワーポイントでプレゼンテーション資料を作成。準備は企画書作り、パワーポイント作成、プロジェクト管理などの役割分担を決めながら行う。同時にプレゼンテーションの練習を繰り返し、グループで評価し合う。

### step 7 「その道のプロ」に評価してもらおう プレゼンテーション

授業に協力いただいた企業や、関係企業に対して子どもたちが商品の企画を提案する。「グループ」ずつプレゼンテーションし、審査員からの質疑応答に応じる。最後に提案結果の講評を受け、最優秀賞等の各賞を決めて表彰する。



### step 8 授業で学んだことを各自発表 ふりかえり

「連」の授業を通して「何を学んだか」を子どもたち、教師、トレーナーが、互いに発表し合う時間を設ける。あるいは感想文などを文章化してふりかえりを行う。

毎回、授業を始める前には全員で活動内容を確認。授業後はそれに対する活動のふりかえりを項目ごとにチェックして、感想を書くことを行う。活動の様子と自分の姿勢を読み返すことで、どのように自分が成長したかを自覚させるのが、授業実施の最大のポイント。

## 授業実施ポイント

- 地域に「ものづくり」に関連する産業がない場合は、近隣の市町村や県全体など、調べる範囲・視野を広げさせる。
- 「ものづくりとは何か」を学習し、テーマの「もの」について知っていることを書き出させる。

**事前に準備すること**  
地域の「ものづくり」産業と、それに該当する企業・関係者などの候補を調べておく。同時に企業や職人の方には協力を依頼。授業の目的を伝え、都合の良い日時や当日の流れ等を打ち合わせ。可能な範囲で実際の商品や校内に持ち込んで、説明してもらえよう。

- 授業の動機づけを行い、ゴール(自転車を企画すること)を認識させる。
- ものづくり企業の考え方、プロセスを知り、商品が「どのような視点」で作られているかを注目・観察させる。

**事前に準備すること**  
事前学習の最後に「次回は○○のプロジェクト報告。主な準備物：スクリーン・プロジェクトタービオ再生機・マイク等」

- 「もの」は、さまざまな角度から見られることに気づかせる。
- 「知っている」と「理解している」の違いに気づくような声かけをする。
- 社会の要望(ニーズ)に応えるには、「もの」の特徴を把握していなければ企画が出来ないことを意識させる。
- 普段よく使っている「もの」をあらためて詳しく観察することで、さまざまな工夫が施されていることを再認識させる。

**事前に準備すること**  
図書館やパソコンルームなど、自由に調べられる場所を手配。主な準備物：分析した内容・結果を書き込めるワークシート等

- 従来ある「もの」の概念やイメージを壊す声かけをする。
- 商品名、ターゲット、課題、予想される成果をグループ内で意見をまとめて、内容を文章化させる。

- 「どうしたらターゲットに使う人が喜ぶだろう」という視点を持たせる。

**事前に準備すること**  
アンケート調査は、課外活動や学校祭などの行事を活用。

- 中間発表では左記の点をはっきり伝わってくるかで評価。

- ① ターゲットは明確か。(課題が提案できているか)
  - ② 目的に背景を捉えているか。(なぜこんな事態が起きるのか)
  - ③ 成果として、課題が解決できている商品になっているか。
  - ④ 工夫点に新しさはあるか。
  - ⑤ 分析・調査した情報が活かされているか。
  - ⑥ タイトルは商品の特徴を上手く捉えているか。
- できるだけ本番に近い状態で行い、緊張感を持たせる。
- 他グループとの「視点の違い」を子どもたちに感じ取ってもらおう。

**事前に準備すること**  
各グループの企画内容と進捗状況を確認しておくこと。

- パワーポイントを使うことで、他人の目や評価をもらうことはチャンスである
- ことを子どもたちに意識させる。
- プレゼンテーションとは、自分たちの企画のキャラクターであり、アピールする機会であることを意識させる。

- パワーポイントの作業後、子どもたちが作成したデータが保存されているかを確認。

**事前に準備すること**  
教師自身もパワーポイントの基本的な操作方法を把握。指導できるようにしておくこと。

- 各種賞を発表。授業全体を通して、頑張っていた個人やグループを評価する。
- プレゼンテーション後、グループで決めた役割を最後まで責任を持って果たすことの大切さを全員で共有。

**事前に準備すること**  
体育館や多目的ルーム等、教室以外でプレゼンテーションを行う場所を確保する。審査員は協力企業をはじめ、地域のものづくり関係者や教育関係者等。プレゼンテーションの審査を依頼する。

主な準備物：スクリーン、プロジェクトタービオ再生機、評価シート、賞状、マイク、審査員用の長机、椅子等

- 「ものづくり」は、「人」と「もの」との関係、「人」と「社会」との関係から生まれていくもので、決して「もの」だけで存在しているのではないこと。そして「このこと」を通じて、社会に役立つための「自分の活かし方」や、「社会の活かし方」を考えるきっかけであったことを確認し、授業のまとめとする。

事前学習 [約5時間]

企画書作成 [約22時間]

まとめ [約3時間]



# 学校と地域の「資源」を活かし育む総合力

## キャリア教育による授業への「意味づけ」

### ◆◆札幌市立駒岡小学校・福住小学校（北海道）

新しいカリキュラムを取り入れることだけが、キャリア教育ではない。普通の学校での取り組みや、地域を調べる活動の中でも、キャリア教育は育まれている。ともに地域資源の意義に気づき、独自のキャリア教育を行う札幌市の小学校二校の取り組みを紹介する。



## 関わり合い、認め合い、深め合う

- ◆◆ 学校林を使った環境教育
- ◆◆ 活動のすべてが
- ◆◆ キャリア教育だった

札幌市の中心部から車で約四十分。周囲をぐるりと自然に囲まれた中に札幌市立駒岡小学校はある。創立時より「学校林」を持つことから長年、学校林で子どもたちの「生きる力」を育む環境教育に取り組んできた同校。普段の授業では、野鳥や植物の観察などの学習場所として活用し、また年二回の全校宿泊体験、小鳥たちの巣箱かけ、火山灰を使った野焼き、スノートレッキングといった、学校行事においても自然活動を多く取り入れている。こうした活動は

主に「みずなら班」と呼ばれる二年生から六年生までのたてわりグループで実施している。上級生がリーダーとなって下級生を取りまとめたり、皆で分担して活動する等、子どもたちにとってみずなら班は、言わば「小さな社会」。ちなみに毎週火曜日には「班ごと」に、月一回は全校児童で給食を食べべて交流を深めている。さらに学校林活動を行う上で、欠かせない人々がいる。子どもたちの保護者をはじめ、卒業生や元PTA、地域住民などで発足した「七年一組」と呼ばれる教育の支援者たちだ。「駒岡にみんなが通える学校を作ろう」と、住民たちが団結して小学校を創立してから約六十年。古くから地域と学校は、強い絆でつな

がっていたこともあり、地域の人々が教育に参加するのは日常的なことなのだ。こうして自然活動を通して、子どもと社会をつなげていた環境教育。キャリア教育との共通点に気づくことになったのは、平成十七年。札幌市内でキャリア教育を推進支援するコーディネーターの言葉だった。「まさにキャリア教育ですね」。学校側は驚いた。学校林を使った活動も行事も、みずなら班も、いつもの授業すべてが、そのままキャリア教育になるとは。教師たちはあらためて、毎日行ってきた授業にある大きな「意味」を確認した。



- ◆◆ 学校の外からの視点により
- ◆◆ 確信した
- ◆◆ 教科の授業の「意味」

駒岡小学校のキャリア教育は、新しいカリキュラムを行うわけではなく、教科の授業に「キャリア教育の視点を取り入れる」という方法。これにはコーディネーターからの「環境教育を土台に、これからは子どもたちにどんな力をつけたいか、『意識』しませんか」という言葉があった。そこで子どもたちが社会で生きていく上で「課題解決能力」と「コミュニケーション能力」が特に必要な力だと考えた。よって「キャリア教育の視点を取り入れる」とは、駒岡小学校の場合「課題解決能力とコミュニケーション能力を育む活動を授業に取り入れる」ことを意味する。学校では、キャリア教育の視点と関連が深いと思われる国語科と算数科の授業で実践することになった。

駒岡小学校の三年生、十九人のクラス。今日の国語科の学習は、『すがたを変える大豆』という説明文の授業だ。授業は学習の課題を全員で読み上げ、共有・確認するところから始まる。さらに何か活動するたびに、まず子どもたちで話し合わせ、教師は子ども同士で話し合った内容に対し、ヒントやアドバイスを提示する位置に立つ。「わあ、見せて！」。子どもたちは、課題に対する答えの部分に線を引き終わると、周りの友達と発表し合いっこ。「ボクはここに工夫があると思うんだ。理由はね...」。自分の考えを友達にわかりやすく表現しようとする子どもたち。「そっかーでも、ここに〇〇と書いてあるから...」。友達が言うた考えを認め、さらに自分の意見を重ねることで共に考えを深める姿勢。授業で子どもたちは交流を重ねる中で、学校が願う二つの能力は、少しずつ磨かれているようだ。





# 子どもたちに「夢」を持たせたい：

- ◆ 札幌ドームに詰まった
- ◆ 多くの知恵、努力、夢に
- ◆ スポットを当てた授業

駒岡小学校同様、地域の資源とキャリア教育を上手くリンクした取り組みがある。札幌市立福住小学校は、全校生徒が約八百人のマンモス校。学校から徒歩十分のところにある札幌ドームは、教室の窓から見えるほど。子どもたちにとって非常に身近な存在だ。野球はもちろん、サッカーや冬のスポーツイベントなども開催できる多目的施設である札幌ドームは、北海道のシンボルであり、長年の「皆さんの夢」だった。こうして人々の思いと作り手の知恵が詰ま



た札幌ドームだが、福住小学校では「施設の見学」に留まっていた。ある時、コーディネーターから「札幌ドームの設計・建設に携わった人たちの知恵や努力、そして実際に施設で働く人たちの姿に触れることも取り入れませんか？」といった札幌ドームの授業における提案があった。夢が持てない子どもたちに心を砕いていた教師たちは、「仕事」や「働くこと」を身近に感じられる内容に共感。授業ではマナー講習や札幌ドームに関わる人たちの講話、学習したことを壁新聞にまとめる活動等も実践した。これが福住小学校の地域資源を活かしたキャリア教育「福住プロジェクトX」だ。

- ◆ 「本物」の声は
- ◆ 子どもたちの心に響く
- ◆ 夢への一歩につながった

「福住プロジェクトX」は、札幌ドームに関する授業だけに留まらない。札幌ドームで「人」と「仕事」とのつながりを知った子どもたちは、さらにさまざまな職種で働く大人に出会う授業へ。今回は子どもたちの要望に沿い、三人のゲストティーチャーを招いた。警察官、パティシエ、イラストレーター。「本物」の前に、子どもたちの表情がグッと引き締まる。「何か一つでも学びたい。知りたい」。そんな姿勢があった。「キーキづくりで嬉しかったことは何ですか?」「どうしてイラストレーターになろうと思ったのです



か?」「警察の仕事で大事にしていることは何ですか?」。子どもたちは夢に近づくための「キーワード」を探っているようだった。そして多くの働く大人に出会うにつれ、自然と相手の立場に立って物事を考え、質問ができるまでに成長していた。

ゲストティーチャーもまた、子どもたちの真つすぐな思いに応え、仕事における「人を思いやる心」を伝えた。警察官は常に人々の安全を考えていること。パティシエはお客様様の要望を意識して作っていること。イラストレーターは依頼者や読者の思いを汲み取って描いていること。働くことは技術や知識だけではなく、相手を思うことが何より大切なのだ、と。こうして福住小学校の六年生たちは、本当の「働く意味」を知った。

## キャリア教育は、子どもたちの傍にある

- ◆ 「意味づけ」をすることは
- ◆ 子どもたちのさまざまな力を
- ◆ 引き出す可能性へ

今回、駒岡小学校の三年生たちは国語科の授業で、積極的に意見を交換し合った。そんな活発に見える子どもたちだが、入学当初は落ち着きがなく、今のように友達の意見を最後まで聞き抜くことさえできなかった。その上、自分の考えを皆の前で話せないほど消極的だったそうだ。しかし教科の授業に、「キャリア教育の視点」を取り入れたことで、子どもたちは次第に臆することなく発言。しかも、しっかりと筋道を立てて話すようにもなっていた。こうして教科の授業で子ども同士による話し合いや活動を繰り返し行うことで、「自分の気持ちを伝えること」「友達の意見を聞くこと」が、子どもたちの一番の楽しみになった。

一方、身近な地域資源である札幌ドームを題材にした授業に、新しい視点を持たせた福住小学校。社会の広がりを感じた子どもたちだが、ゲストティーチャーの講話を聞いた児童の一人から、こんな感想が飛び出した。「小さい頃からスゴく絵に興味は持っていたけど、エライ人から命令されたり、寝る暇もないくらい忙しい仕事だと思っていたから不安で…。でもイラストレーターの仕事は、自分らしい絵も描けるし、「絵を描



くことが楽しい!」って言っていたから、ステキな仕事だと思っ、私の将来の夢に加わえました。子どもたちは、最初から「夢」を持つていなかったわけではない。さまざまな情報を浴びるうちに、仕事や働くことに対する意識が歪んだものへと変わり、抱えていた夢を諦めようとしていたのではないだろうか。この児童は、実際に社会で働く大人の声を聞いたことで、再び夢に向かって歩き出した。

二校で行われているキャリア教育の共通点は、もともと学校や地域にあるものに、「意味づけ」をしたこと。問題を解くことは、課題解決能力に。発表することは、コミュニケーション能力に。物事を掘り下げて考えることは、興味関心の育成に。毎日の学校での授業や取り組み、身近なものの中に、将来、子どもたちが生きていく上で役立つ「総合力」を育む要素が隠されているのだ。



# みんな、つながっている キャリア教育 の足跡

キャリア教育によって子どもたちからさまざまな成果物がうまれた。そして支援する大人たちも多くの足跡を残している。



## 学校林でつくったよ!

### 野焼き

野焼きとは、土器をつくる過程で窯を使わず、屋外で焼く焼き物のこと。学校林を所有する駒岡小学校では毎秋、全校児童で野焼き体験を行う。野焼きの指導・お手伝いには、通称『7年1組』と呼ばれる地域の人々や保護者の方が参加。子どもたちの野焼きには、大人たちとの交流によって育んだあたたかさかさがにじみ出ている。

## キャリア教育への 理解を深めるツール

### リーフレット

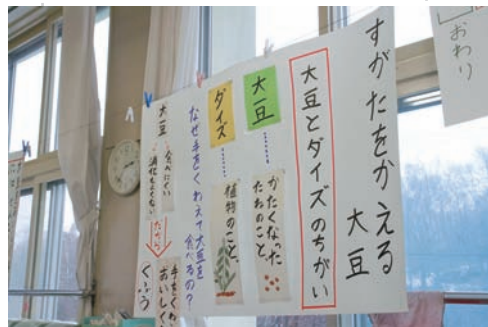
札幌市内で実施中のキャリア教育について学校ごとにまとめたリーフレット。キャリア教育への理解・協力につながることをねらいとしている。写真はSapporo『夢探究プロジェクト』事務局で作ったものだが、今後は学校独自で作成していく予定。配布先は各学校で異なるものの、保護者や地域の人々、近隣の小中学校等に配布することで、キャリア教育への理解を得ることにつながる。



## 札幌ドームって、すごい!

### 新聞

これは福住小学校のキャリア教育『福住プロジェクトX』の前半、札幌ドームに関する授業の総まとめ。授業では設計者の思いや施設内で働く人など、現場の裏側にも注目した。新聞には「ベンチは固く、背もたれの角度は90度。これは選手が試合で緊張感を保つために考えて設計」等、子どもたちなりに「仕事とは何か」や「働く人の思い」を捉えた内容になっている。



## 前時までの授業内容を確認

### 学習のふりかえり

駒岡小学校で行われた3年生の国語科の授業で担任の平井教諭が、前時までの学習内容をまとめた用紙。学習の道筋を目に見える形で表すことで、子どもたちは内容とともに、「いつ」「誰」がその意見を発したかをふりかえることができる。こうして友達の気持ちや考えを理解しようとするコミュニケーション能力を育む。



## キャリア教育から生まれたもう1つの物語

# 子どもたちの「幸せ」とは何か 突き詰めた先に見えた教科の授業

研究会では、駒岡小学校でキャリア教育に3年間たずさわる石川教諭が司会に、山本校長が意見を取りまとめながら進行。今回の授業担当者である平井教諭は、説明文の授業を行うにあたり、周囲の教師からアドバイスをもらうなどして準備に3週間。なお研究会には、札幌市内のキャリア教育を支援するキャリアバンク(株)のコーディネーターの皆さんも参加した。

## 駒岡小学校のキャリア教育とは? 考えや思いを共有する研究会

キャリア教育の視点を取り入れて実施された駒岡小学校3年生の国語科の学習。授業が行われた日の放課後、全教師八名が集まり、「自他を思いやり、進んで関わりあい、思いや考えを表現できる実践力のあふれる子どもの育成」という主題で、今回の授業をふりかえる研究会が行われた。

「『工夫点』にサイドラインを引かせる活動は、引く時のポイントを子どもたちに提示したら、もっと必然性が出たかも」。「接続詞に注目して、的確にラインを引くことができた子もいたけど、なぜ『工夫点』に引くのが分らず、文章全部や単語だけに引く子もいたもんね」。「発表する前に一度、周りや意見を交流させる活動は、子どもたちの間で自然と対話がうまれていい。発表の時も友達の意見を踏まえながら、自分の考えを言う。そんな子どもたちの仲間を思いやる姿も見えた。それに交流することで、子どもたちは自分の考えが整理され、発表内容も深まっていた」。

このように授業での子どもたちの言動をもとに、キャリア教育の視点(つまりコミュニケーション能力や課題解決能力を育む活動)につながっていたかを中心に話し合われた研究会。今後さらに、これらの能力を深めるためには、教師が子どもたちに対して、どのような声掛けや関わりが必要か。また、各教師が自分の授業観をつくり上げていく上で何を大切にすべきか等、教師たちの話し合いは約二時間続いた。

## 「せんせい!国語のじゅぎょう たのしかったよ!」

研究会の実施には、「全教師のキャリア教育への理解を深める」というもう一つの目的がある。実は今回の授業者である新任の平井教諭をはじめ、駒岡小学校の教師はほぼ全員がキャリア教育未経験者。よって、教科の授業に「キャリア教育の視点を取り入れる」とはどういうことなのか。教師たちは、理解に苦しんでいた。そこでまず、教師たちは各自指導案に「キャリア教育の視点」という項目を設け、授業の中での部分で目指す能力を育むかを提示。さらに校内でキャリア教育の視点を取り入れた授業を行う日は、教師全員で見学し、研究会で「子どもたちに付けたい力」をその都度共有する。こうしてキャリア教育の授業への不安・疑問を全員で解消していった。

「キャリア教育の視点」を取り入れた授業の実施から三年。今、教師たちが楽しみにしていることがある。それはコーディネーターによる、駒岡小学校での授業の様子を綴ったブログだ。キャリア教育の視点を取り入れた授業が実施される日にはコーディネーターが必ず見学し、その日のうちに授業の内容や子どもたちの反応等を掲載する。教師たちはブログによって自分の授業を客観的に見られる上、札幌市内で同じようにキャリア教育を行う他学校の取り組み等も知ることができ、毎日の授業の励みになっているそう。だ。「せんせい!国語のじゅぎょうたのしかったよ!」。今日もまた子どもたちの笑い声が校内にこだまする。





## 教師・保護者・支援者の声

キャリア教育の視点を授業に取り入れ始めてからは教師、子どもともに「自分の意見を言いつぶしにするのではなく、相手に分かりやすいように伝えること」を意識しています。子どもたちは、お互いの考えが「分かる」という感覚が楽しいようです。  
(駒岡小学校：平井弘志教諭)

今の子どもたちの多くは、夢を持ちにくい状況にあるように思います。学校ではこうした授業を通して、子どもたちにできるだけ多くの働く大人と出会うきっかけづくりができればと思っています。そして子どもたちに「あんな職業もあるんだ!」という気づき生まれ、夢を持つ一歩につながればと願っています。  
(福住小学校：村岡美千世教諭)

6年生ながら、どの子もしっかりとした考えを持っていることに驚きました。授業では「警察とはどんな仕事なのか」という話を中心に、できるだけわかりやすい言葉で話すように心がけました。こうして子どもたちの疑問や不安を解消することで、働くことに対する理解、仕事への安心感が生まれると思ったからです。ちなみに授業当日、自分の娘が講話を聞きに来てくれましたが、時々鋭い視線を感じて…緊張しました(苦笑)。  
(ゲストティーチャー：北海道警察)

仕事柄、小学生と交流することはありませんし、しかもこんなに大勢の前で話す機会もないので、今回の授業は自分にとって貴重な経験になりました。授業では想像以上に子どもたちの「仕事」に対する興味・関心の高さを感じました。  
(ゲストティーチャー：パティシエ)

「なぜこの仕事を始めたのか」「どんな気持ちで仕事をしているのか」。子どもたちからの質問で、あらためて自分の仕事に対する思いをふりかえることができました。子どもたちには、身の回りにあるすべてのものに、絵を描く資料や将来の役に立つ知識などが詰まっていることを伝えました。子どもの時にしか味わえない、たくさんの感動・体験をしてほしいですね。  
(ゲストティーチャー：イラストレーター)

## 子どもたちの声

札幌市のキャリア教育は、各学校が掲げる教育目標や子どもの姿に合わせた授業を行うことを第一に実施。子どもたちの感想からは、実社会で必要な力が身につけていることが感じられる。

みんなではっぴょうするのが、とてもおもしろかったです。  
(駒岡小学校3年生)

じぶんのいけんをいたり、おともだちのいうことをきくのが、たのしかったです。  
(駒岡小学校3年生)

働くということは責任を持って人のために役立てるように頑張ることだとわかりました。  
(福住小学校6年生)

ドームのことをたくさん知ることができて面白かったのですが、何よりも働いている人にすごく感動しました。働くことは人との一種のコミュニケーションなんだと思います。私もかっこいいと思われるように働きたいです。  
(福住小学校6年生)

私は将来音楽関係の仕事に就きたいです。だからたくさんの人にステキで心安らく音楽を聴かせてあげたいです。でもなりたい仕事に就けなくても、たくさんの人に「ありがとう」と言ってもらえる、そんな仕事がしたいです。  
(福住小学校6年生)



# 授業実施スケジュール

## 授業内容

## 授業実施ポイント

### step 1 オリエンテーション

授業の「目的」を意識させる  
まず、子どもたちに「自分のやりたい職業」や「働くことの意味とは何か」について投げかける。全員で意見交換をしながら、これから取り組む授業の目的を理解する。次の時間では、福住小学校の場合、地域資源の代表格である「札幌ドーム」をテーマに、札幌ドームに関連する仕事や職業について目を向け、子ども興味・関心を喚起。

### step 2 地域資源の中に「仕事」を見いだす 事前学習

見学・体験の第二段階として、「札幌ドーム」がつくられた過程に着目。子どもたちは建設・設計に関わった人々の存在を知り、つくる上での疑問点などを書き出す。そして実際に札幌ドームの建設に関わった人々に、つくる際の工夫や努力、苦勞などを聞き、質問を行う。

### step 3 働くことや仕事への「視野」を広げる 見学・体験

次に、ドーム全体や館内の各施設で働く「人」について知り、各自「学びたい視点」を定める。なお事前に、働く現場を見せってもらう上で「マナーや見学の心得を学び、見学に備える。『学びたい視点』を持って見学・体験に臨んだ後、わかったこと、もっと知りたいことについて意見交換をする。交流し、まとめたことをもとに、step 2「事前学習」の授業同様、実際に札幌ドームで働いている人を招き、仕事内容や働く上で

の工夫・努力等を聞く。最後に見学・体験を中心とした2連の授業を通して、考えをまとめる。

### step 4 見学・体験で得たことを発信する 新聞作成

これまでに学習してきたことを各自で新聞にまとめる。考えを整理するとともに、さらに広い視野で「働く人」を知る学習につながる。

### step 5 社会で働くさまざまな大人に学ぶ 自己探究

さらに「仕事」や「働くこと」への視野を広げるため、社会にあるさまざまな職種と、その仕事に従事する人について調べる。調べた中で子どもたちの関心が高かった職種をピックアップ。実際に、その仕事に就く大人（数名）を招き、子どもたちは興味のあるゲストティーチャーの講座に分かれて話を聞く。仕事に対するやりがいなどを直接聞くことで、よりリアルに「働く意味」について理解する。



### step 6 自分なりの「働く意味」をまとめる ふりかえり

全授業を通して出会った働く大人たちから学んだことを踏まえ、「自分の将来」「社会とのつながり」「働く意味」についてふりかえり、最後に作文等にまとめる。

札幌市で行われているキャリア教育のカリキュラム例として、学校周辺の地域資源と、総合的な学習の時間を上手く使った福住小学校の取り組み(福住プロジェクトX)を紹介する。事前学習↓体験↓ふりかえりを繰り返し、意味つけていくことが授業の特徴。

- 社会のさまざまな仕組みや働き方を学ぶ授業であることを明確にし、子どもたちに目的意識を持たせる。
- 学校の周辺にどんな産業や資源があるのかを見つめ直すことが、この時間のポイント。

#### 事前に準備すること

学校周辺の地域資源について調べておく。また次の授業に向け、内容に沿ったゲストティーチャーを選出。アポイントメントを取る。講話を聞く授業に向け、視聴覚室などの広めの教室も準備。

主な準備物：授業ごとにふりかえりができるワークシート等

- 子どもたちに地域資源(福住小学校の場合、札幌ドーム)について調べさせ、各自興味関心を持たせることで、より身近なものとして意識させる。
- 授業後、建設・設計に関わった方々から学んだこと、思いをまとめたお礼状を出すことで、子どもたちが自分の考えを整理することにつながる。

#### 事前に準備すること

主な準備物：お礼状用のシート

- 授業時間の目安として、働く「人」についての授業で2時間、マナー講座で2時間、見学で約2時間、見学のまとめで2時間、ゲストティーチャーを招いた授業で12時間、最後のまとめで2時間。

- 単に見学・体験のみ行うのではなく、必ず事前学習(調べ学習やマナー講座)とふりかえり(体験したことをまとめ、整理する)をセットにする。
- step 2「事前学習」の導入時の授業同様、講話をいただいた人々にお礼状を書くことで自分の考えをまとめ、働く人への感謝の気持ちを持つことにつながる。

#### 事前に準備すること

見学・体験先にアポイントメントを取る。当日までに授業の意図(目的)や、見学の流れ等について担当の方と打ち合わせをする。

- 「新聞」という形にまとめる手法は、読む人のことを意識しながら、今までの学習で得た情報を整理できる良さがある。さらに、「新聞」という限られたスペースによって、自分は何が一番伝えたいのかを絞り込むことができ、より子どもたちの中で仕事や働くことに対する視点が明確になる。

#### 事前に準備すること

書き損じなどを考慮して、新聞づくり用の紙(目安はA4×B4サイズ)は少し多めに用意。

- 「働く意味」を見いだせるよう、事前に質問したいことを書き出しておくよう声かけをする。

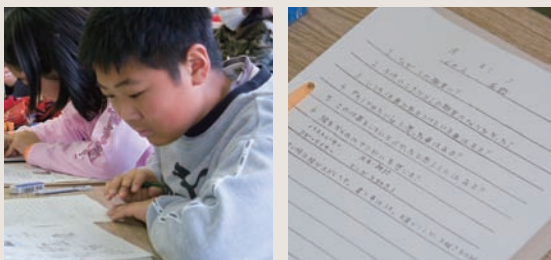
#### 事前に準備すること

平成十九年度のゲストティーチャーは、警察官・パティシエ・イラストレーターの方々を招いた。

- 講話後は、どのゲストティーチャーにどんな話を聞いたら各自が発表する時間をもつけ、全員で情報を共有。話し合う中で、共通点を見いだすことがふりかえりの目的。

#### 事前に準備すること

ゲストティーチャーの方にどんな話をしてもらえば良いか迷った場合、ひとまず授業の目的・ねらいを伝え、あとは自由に話してもらいましょう。



- 単なる感想文にならないよう、「働く意味」を踏まえた上で、自分の考えを書くように子どもたちに声かけをする。

まとめ [約8~10時間]

体験学習 [約16時間]

導入 [約2時間]



# 小学校・中学校連携のキャリア教育を模索

## キャリア教育で学校が変わる

### ◆◆大館市立釈迦内小学校・第二中学校(秋田県)

秋田県大館市は「きりたんぼ」「曲げわっぱ」「秋田犬」「比内鶏」と名物が多い。この「地域」をテーマに違う切り口から小学校・中学校で行われているキャリア教育。釈迦内小学校はキャリア教育で平成十九年度「文部科学大臣表彰」を受賞。キャリア教育は浸透すると学校や教員はどう変わるのか？第二中学校の動きと共に紹介しよう。

#### ◆◆小学六年生で「きりたんぼプロジェクト」

朝番、六十升の炊きあがったご飯が大館市立釈迦内小学校の体育館に届く。エプロンと三角巾の五十七人の六年生たちが、歓声を上げながら重いご飯を運ぶ。「会社」別に五、六人ずつのグループになった子どもたちが手伝いに訪れたお母さんたちと共に、作業を始める。目標は千本のきりたんぼ。真っ白な普

通のきりたんぼだけでなく、あんこ入り、野菜入り…。すでに「きりたんぼ」というよりも「オリジナルご飯料理」と言った方がいいほどユニークなご飯を使ったメニューとなっている。

明日これを販売するために、今日一日で作りあげなくてはならない。何時になろうとも、やりきるのだ！と子どもたちは、保護者や教師たちが驚くほどの集中力を発揮。作業は昨年よりも早く無事十六時に終了した。

次の日は近くのスーパーマーケットの駐車

場で販売体験。各社でつくったカラフルな看板が下がっている。

「いらっしゃい、おいしいきりたんぼですよ」。大きな声で誘いこむ戦略の店。味噌をつけてあぶり、香りで人を呼び寄せる会社…。「販売体験」という大舞台を控えた子どもたちは、お買い物に行った際にもさまざまな販売戦略が目がいくようになったという。「いい香りがすると食べたくなるよね」「大声で呼びかけられると、なんか気になる」。そしてその戦略を取り入れているのだ。みるみるうちに人だかりができて、なん

と二時間で完売。事前に練習したきれいなおじぎをするヒマもないほどの盛況ぶりに、子どもたちは満面の笑顔。

後日、その日の売り上げの現金を前に各社で計算し、米や材料などの仕入れ分や、ひとり五百円の人件費、法人税にみたてた税金(！)、事前に借りた融資金の返済金を引いていく。

お買い物ゲームや会社づくりから始まり、半年以上かけた「きりたんぼプロジェクト」は、こうして終了。無事ほとんどの会社が黒字となった。

## 地元の名物を作り販売する。体験し宣伝する。



#### ◆◆中学二年生で「大館の体験型観光の提案」

◆◆パンフレットを作りプレゼンする

一方、大館市立第二中学校では、パワーポイントの資料を背に、真剣な面持ちの二年生がプレゼンテーションを実施。テーマは「全国に向けた大館の体験型観光の提案」。

大館には、きりたんぼ、曲げわっぱ、秋田犬・比内鶏と全国的に有名な名物がたくさんある。しかし実際には観光地でもなければ、地元の人々がそれらを使って積極的に

観光化を進めようと思っているわけでもない。その地元の現状に対して、二石を投じる意味も含め「観光地化」をテーマにしたのである。しかし、子どもたちも想像以上に地元の情報を知らなかった。

「大館の自然はどうだろう。たとえば雪はどうだろう。キミたちが沖繩に行ったら青い海に感動するように南に住む人たちは真っ白な雪に感動することもあるんだよ」

しかし生徒たちの反応は薄い。全国の人に知ってもらうためには、まず自分たちが地元を知り、名物を誇りに感

じなければ。そこで急遽「大館名物体験」

を子ども達にさせるようプログラムを追加。地元にとんなものがあるか知り、そこから自分たちが題材を選択してポイントを取り、実際に制作体験をすることになった。

体験しているからこそ、パンフレット作りやプレゼンテーションにもチカラが入る。パンフレットには自分たちの体験の写真を掲載し、自分が選んだものの何を訴えれば良さが伝わるのかを考えてプレゼンする。

「実際に買ったなら六千円もする曲げわっぱが、千五百円で自分で作れます！」

安さをポイントにおくグループ、その歴史や背景を語るグループ…。

集まった大人は、大館市観光協会の会長や旅行代理店の営業担当者。体験型観光をどう広げていくか。大人たちも提案に対して真剣に答える。

「東京の人達は大館がどこにあるかさえわからない。そこから教えてあげよう」「こは間違っている。インターネットの情報はそのまま信じてはいけません」

生徒たちは少しだけ大人びた顔をしながら、大人たちの講評を聞いていた。



## 小学校・中学校の連携は可能か？ 模索が続く



- ◆◆◆ 三年間でキャリア教育が
- ◆◆◆ 学校と地域に根づいていき
- ◆◆◆ 教師と生徒の関わりも変化

第二中学校がはじめての長いカリキュラムにとまどったように、三年前の釈迦内小学校も大変だった。初年度は田んぼづくり、米作りから行い、きりたんぼ作り・販売だけでなく、余ったお米をネット販売した。民間コーディネーターと二人三脚で二年がかりの大プロジェクト。面白かったが混乱もあった。

今年、五年生の理科ですでに体験済みの米作りはカリキュラムからはぶいた。毎年担当教師が、その学年にあわせて少しずつカリキュラムを変更している。少しずつ変更しながら三年続け、今では「キャリア教育は釈迦内小の特徴であり伝統」となった。下級生たちは「六年生になったら私たちがキャリア教育を受けたい」と期待を持っている。子どもが六年生になったらキャリア教育を手伝う、という意識も保護者の中で浸透しはじめている。

そして今年「きりたんぼプロジェクト」終了後の利益をどう使うか、というキャリア教育がコーディネーターのチカラを借りずに教師と生徒たちでスタートしている。生徒ひとりあたり五百円という人件費を含んだ数万円のお金。家庭科の「地域とわたし達」という六年間の自分たちをふりかえる単元を使って、六年間にお世話になった方々を思い出し、その方々に感謝をこめて何をプレゼントするかを考えて実行する。卒業までのプロジェクトとなりそうだ。

- ◆◆◆ 小学校で面白いキャリア教育を
- ◆◆◆ 受けてきた子どもたちに
- ◆◆◆ 中学校で何をさせるか？

釈迦内小学校で「きりたんぼプロジェクト」が始まったのは三年前。釈迦内小学校の子どもたちはそのまま第二中学校に上がる。つまり今回第二中学校で「体験型観光提案」を行った二年生は、釈迦内小学校六年の時に「きりたんぼプロジェクト」を経験しているのだ。

「小学校の時には大館の良さを味わって、中学になったら大館の良さを外のの人に教える経験をしているんだと思った」と語るのは現在中二のTさん。

子どもの中でふたつのキャリア教育は確かに繋がっている。小学校でも中学校でも同じコーディネーターに会うということでも継続感はある感度できるだろう。

しかし実際には難しい部分も多い。小学校で「大プロジェクト」を行ってきた彼らは口々に「小学校は楽しかった」と言う。中学側は「体小学校で何をしてきたんだ？」という戸惑いを感じる。またキャリア教育としての時間がそれほど取れない中学校で何をさせるのか。コーディネーターと共にカリキュラムを作成していったが、学校として初めて行う計三十時間以上のプロジェクトは重く感じられた。また始まってみると、生徒たちは思惑通りには動いてくれず、当初は予定のなかったプログラムを追加し、時間はどんどんかかかっていく。技術科のITの単元でプレゼンテーションの資料を作り、国語科の表現の学習としてプレゼンテー

ションの練習を行う。

「正直言って年終わって達成感よりも、ホッとしたという感じです」というのは、担当の菅原教諭。キャリア教育二年目の正直な感想である。今後は予算や労力のスリム化なども考えながら、効果的なカリキュラムを考えていきたいという。

中学校のキャリア教育の場合は、高等学校進学への進路指導とのかねあいで難しいことが多い。また小中・中高の連携がさまざまな場面で重用視されている今、キャリア教育も同じ課題を抱えている。

釈迦内小学校と第二中学校の取り組みは、まだ始まったばかり。具体的な動きがあるわけではないが、学校経営目標などが異なる小学校・中学校で継続していくためには、もっと情報共有などの仕組みが必要かもしれない。



## キャリア教育の継続によって 子ども、そして教師、学校、地域が変わっていく



# アイデアと工夫がいっぱい キャリア教育 の足跡

「ぎりたんぼ作り・販売」の小学校、  
「体験型観光パンフレット制作」  
の中学校。どちらも工夫いっば  
いの制作物をたくさん作った。

小学校

## 固定観念にとわられない 創作ぎりたんぼ(?)

普通の「(味を付けていない)たんぼ」だけ  
でなく、オリジナルぎりたんぼも製作。試  
作の時には、材料の分量を量ってメモしな  
がら、少しずつ加えていくなど再現性を持  
たせる苦労も。最初は不器用だった子ども  
たちもいくつも作るうちにきれいな形に。

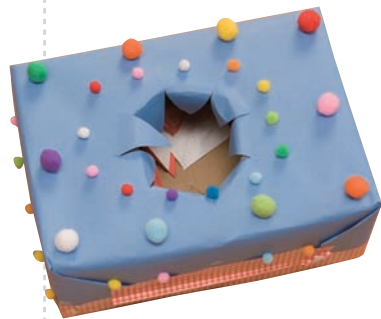


小学校

## 自社だけのサービスを 考えた

### おまけ

他の店にはないサービスを、と各  
社で自分たちなりの販売戦略を考案。  
買ってくれた人がクジをひけると  
いうサービスを考えた店もある。



中学校

## 他の地区で配りたい 体験型観光パンフレット



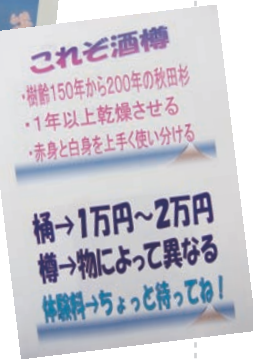
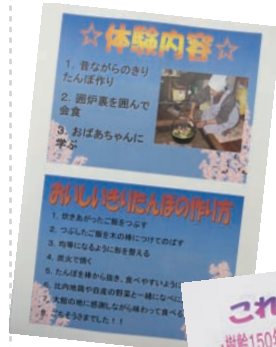
中学三年生の東京への  
修学旅行の際には、こ  
れを持参して配る計画  
もある。写真の選び方  
や情報の入れ方なども、  
プレゼンテーションで  
指摘された点を改善し  
て配布予定。

中学校

## 観光のプロたちを うならせたい

### プレゼンテーションシート

自分たちが考えた「体験型観  
光パンフレット」を使っても  
らうためのプレゼンテーショ  
ンシート。これを使って観光  
協会の方や旅行代理店の方に  
「体験型観光」の楽しさと可能  
性を提案する。



小学校

## いかに目立つか!

### かんばん

会社づくりからスタートし、社名・役  
割・会社の営業方針なども決めた。当  
然販売体験当日の看板にも、社名を  
打ち出すことに。各自がそれぞれ目  
立つような工夫をしている。



## キャリア教育から生まれたもう1つの物語

# 偶然の出会いがきっかけで 教師たちを変えていくキャリア教育

この出会いから金融経済教育・キャ  
リア教育の浸透や、大館の地域活  
性化を目的に「NPO法人ひとと  
くらしとまち大館ネットワーク」  
が発足された。事務局長の小棚木  
政之さんは「キャリア教育」を公約  
に市議員に立候補・当選。市議会  
でも教育が論じられることが多く  
なったという。

さまざまな目的を持った大人たちが  
キャリア教育の旗印の下に集う

秋田県大館市は、良質な黒鉱が採掘で  
きる鉱山の街として栄えた過去を持ちな  
がら、今では繁華街がシャッター街になりつ  
つある街である。そんな大館に危機感を持つ  
たふるさとを愛する「大館まちづくり協  
会」などのさまざまな団体と、子どもへの  
金融経済教育の活動の場を全国で探す  
「NPO法人金融知力普及協会」、子ども  
と大人が関わる何かができないかと模索  
する「大館市教育委員会」。彼らが出会  
うことが、このキャリア教育のタネとなつた。  
そしてもうひとり。釈迦内小学校の花  
田教諭。二年目はワケがわからないまま走  
り、二年目は校内で研修をして他の教師の  
方々にも理解を深め、三年かけて学校に根  
づいたキャリア教育。花田教諭は「キャリア  
教育三年目になつてわかること」として話  
しはじめてくれた。

「僕は最初のうち、イベントをやるのがキャ  
リア教育だと思っていました。イベントで盛  
り上がり、そこで感じることも、学ぶことがあ  
れば大きな成果だと。けれども、今はそれ  
が本質だとは思っていません。イベントで成  
果を出すためには、自分で考えること、意  
見を伝えること、人の話を聞くこと...、そ  
うしたチカラが必要です。まずは六年生で  
のイベントをひとつのゴールに設定しながら、  
各学年で目標をつくって積み上げていく。  
それがキャリア教育なんじゃないかと」

「街のイベントで、バイトで生計を立てなが  
ら陶芸家と名乗る人に出会いました。彼か  
ら職業とはお金を稼ぐかどうかではなく、  
誇りを持って何をしているかによって、自分  
で決めるんだと教えてもらえた。こうした  
出会いで僕の気持ちが豊かになれば、それ  
を子どもたちに伝えていくこともできる。  
キャリア教育で一番学べるのは教師かもしれ  
ませんね」

たとえば「年生は「家の手伝いをする」「あ  
いさつをする」「返事をする」。それは教師  
の今までの指導と大きくは変わらない。違う  
のは「六年生になったら行う活動」という  
具体的な目標があることだ。子どもたちは  
六年生の姿を見ながら、挨拶や自ら動くこ  
との必要性を実感することができている。また  
教師自身も、自信を持って指導ができる。

「日頃教育現場にいると、大きな視点を忘  
れそうになることがあるんです。でも、キャ  
リア教育に取り組むことで「教育とは彼ら  
が立派な社会人になるために行っているん  
だ」と、改めて目標を覚えてもらえたよう  
な気がします」

日景校長は「キャリア教育はすでに釈迦  
内の伝統」と言い切る。キャリア教育の浸  
透によって学校全体の学力アップも実感し  
ているという。子どもが変わり、教師も変  
わつた。キャリア教育を通して地域でいくつ  
もの出会いがあり、教師自身も知らなかつ  
た生き方を知ることができるようになつた  
という。





## 教師・保護者・支援者の声

早くから社会に興味をもっているようなので、将来設計を自分でできるきっかけになれば助かります。

(釈迦内小学校6年:保護者)

学校と保護者のつながりが希薄となっている現代では、このように学校にかかわる行事も必要だと思います。

(釈迦内小学校6年:保護者)

生徒たちは自分のふるさとの「良さや可能性」を再認識し、大切に作る心も育ったように思っています。今回の貴重な体験が生徒たちの今後の人生の中で大いに役立ってくれることを願っています。

(第二中学校:菅原洋一教諭)

生徒にとってはもちろん、我々にとっても準備・体験・まとめという過程の中でそれぞれに学ぶべきことがあり、どれも興味深いものでした。貴重な体験となりました。

(第二中学校:奈良田夏子教諭)

地域を元気にしたいと始めたキャリア教育。子ども達の笑顔が増えただけではなく、学校には活気が、保護者には教育への関心が、そして地域には活力が生まれたと思います。地域活性化にキャリア教育は有効です!私もキャリア教育が高じて市議会議員になりました!

(コーディネーター:小棚木政之さん)

釈迦内地区を盛り上げる意味(賑わい創出)からも続けて欲しいです。

(地区行政協力員)

## 子どもたちの声

私は決してニートになんかならないで、リッパな社会人になりたいです。

(釈迦内小学校6年)

「きりたんぼ販売」を通して、仕事の大切さを学びました。それと同時に仕事の大変さも分かりました。でもその何倍も大きな喜びや楽しさを教えてくれました。

(釈迦内小学校6年)

自分の夢はまだ決まっていないけど、勉強してきた中でやりたい職業が見えてきました。

(第二中学校2年)

お金を得るために苦労したけど、その分達成感があったと思う。働くことは難しいことだけど、とても大切なことだと思う。

(釈迦内小学校6年)

お店の人の気持ちを聞いて、将来自分が好きだからやれる、頑張れる仕事をやりたいと思うようになりました。

(第二中学校2年)

他の教科の授業ではできないような体験や、習わないことなども教えてもらい、とても刺激的で面白い授業でした。

(第二中学校2年)

大館という地域性を大切にしながら作られた釈迦内小学校・第二中学校のキャリア教育。保護者の参加も多く、地域になくはないものになりつつあります。



# 授業実施スケジュール

## 授業内容

## 授業実施ポイント

### step 1 社会・経済の仕組みを理解させる マーケティングの基礎学習・ お金の学習

まず、キャリア教育の目的とこれからの授業内容について説明。大学のマーケティングの講義で最初に習うような内容を子どもたちにわかりやすく伝え、ものづくりや販売の基本、社会・経済の仕組みを理解させる。また自分でお金を管理していないため、お金に対して実感のない子どもが多いので、「お買い物ゲーム」などを使ってお金の大切さや合理的に選択することの意義を理解させる。

### step 2 自分たちの理念を考える 事業計画立案

「きりたんぼ」の製作・販売のためのグループをつくり、会社化。営業方針や役割分担を決めさせる。また「オリジナルきりたんぼ」のアイデアを出し、必要な材料を割り出し、費用総額から価格を割り出す。販売促進計画なども立て、ものづくり販売に対して全体の計画をつくり、いく。



### step 3 経済の仕組みを知り、実感させる 融資プレゼンテーション

地元銀行の方に銀行業務を教えてください。各社が自分の借りたい金額と理由を銀行の方にプレゼンテーション。融資を承諾してもらおう。



### step 4 お客様にどうアピールするのか 広告制作

事前に配るチラシや販売当日に貼っておく看板などを作成。実際に広告のことがわかるゲストティーチャーに話を聞いた後に、作業を行う。事前に試作をして写真を撮影しておき、その写真なども素材として使う。

### step 5 販売前日につくりきる きりたんぼづくり

保護者にも手伝ってもらい、一日かけて体育館できりたんぼを製作。

### step 6 実際に売ってみる 販売体験

スーパーマーケットの駐車場の一角を借りて販売体験。セレモニーを行い、スーパーマーケット店長や各社社長(子ども)が挨拶。またコーディネーターから「授業の環であること」を話した上で、オープン。



### step 7 計画どおり進んだのか評価 収支決算と評価

販売当日の売り上げの中から、借入金返済や人件費、税金などを引いて収支決算を行う。またPTAや地域の方々など「審査員」に、販売当日味や接客など十項目チェックをもらっておき評価を伝える。

### step 8 学んだこと、役に立ったことをふりかえる 発表会

グループごとに連日の授業で学んだこと、感想、反省、将来の役にたつことをまとめる。その後、グループごとに活動の成果を発表する。

釈迦内小学校の「きりたんぼプロジェクト」は、約四十時間をかけて「きりたんぼ作り&販売体験」を行う。地元産業界のニーズをくみ取り、地域特性を活かした体系的なカリキュラムをもとに職業観・勤労観の醸成をめざす。

● 事前学習は「必要な知識に対して興味を持たせる」ことが重要なので、講義ではなくゲーム形式で。

● 「お店を開くならどこに開く？」と、地図上で店舗に好ましい立地を考えさせて発表させる。「なぜその場所を選んだか？」という理由を聞きながら解説をしていき、「ブレイス(場所)、ブライス(価格)、プロダクツ(商品)、プロモーション(広告)」によって商売の結果が変わることを理解させる。

● 「お買い物ゲーム」や「お小遣い帳のつけたゲーム」を通して、お金を実感として認識させる。

● さらにお金に対する実感を深めるために、「ブレイス・ブライスを家族四人で行くといくらかかる？」といった子どもたちの興味をひく例を出し、実際に計算していく。あるいは日常生活をふりかえり生活費がどの程度必要なのかを考えていく。

● 目標達成に向けて意見の異なる人も協力しあっていくことは学習目標のひとつ。あえてグループわけは出席番号順で機械的に実施。

● 社名の決定はさほど大切ではないにも関わらず、時間がかかると多い。

● 「放課後に決めておいてね」と宿題にするとうまくいかない。

● 子どもたちはゼロからの発想は苦手。ヒントを用意しておく。「オリジナル」アイデアが出やすい。またその際に、実現可能かどうか、喜んでもらえるかどうかも検討させる。

● このプレゼンテーションが、プロセスの中で一番緊張した場面として子どもたちの印象に残るようだ。銀行の方にも「営業方針は？」など質問をしていた。リアルさを大切にしている。

● 事前に行う試作は、分量などもきちんと量らせながら、再現性を求めることが大切。

● テレビコマーシャルなどを見せながら、広告の意味などに気づかせる。

● 広告作りを手書きで行うか、パソコンを使うかは学校の方針次第。

● 事前に保健所などにも相談し、当日手伝いの保護者を含め全員に検便を実施した。

● ものづくり前日には、地元企業や商店から材料を購入。

● ものづくりの成功は事前のダンドリが大きい。昨年までは炊飯器持参で学校中のコンセントを使って、何度もブレイカーを落としたが、今年は一度に炊飯してくれる業者さんを見つけて依頼。

● 事前に(ものづくりより前)スーパーマーケットの研修担当者に外部講師として来ていただき、挨拶やマナーなどを教えてもらって置く。

● 保護者や協力者のチカラを借り、当日朝テントなどを張っておく。

● 保護者などが大量に購入してすぐに売り切れてしまうことが多い。販売体験は売り切れることが目標ではなく、その体験を通しての学びが大切なのだ、ということを事前に伝えておく。またその上で、セレモニーできちんと。

● 他者(お客さん)からの客観的な評価を知らせることで、自分たちとは違った視点に触れ、新たな見方・考え方に気づかせる。

● IT学習やプレゼンテーションの盛り上げ方などの学習を含めても効果的。全学年で発表会を行うと、他の学年にもキャリア教育の内容が伝わって特に下級生には期待感を抱かせるきっかけとなる。

事前学習 [約4時間]

体験学習 [約34時間]

事後学習 [約8時間]



# 職場体験で自分の殻を破る子どもたち

市民も協力！地域密着型キャリア教育 ◆◆瀬戸市立祖東中学校・本山中学校（愛知県）

瀬戸焼の町・愛知県瀬戸市にある祖東中学校では平成十九年度の十二月初旬に三日間の職場体験学習が行われた。期待と不安を抱いて臨んだ中学生たちの心の変化を追った。

- ◆◆ドキドキしながら
- ◆◆職場体験先でチャレンジした
- ◆◆初めての先生役

「お兄ちゃん、できたじゃん」  
園児たちにはやし立てられて、はにかんだ笑顔を浮かべるN君。保育園の先生にならって、悪戦苦闘しながら園児たちに毛糸のボールを作ったところだ。

愛知県瀬戸市立祖東中学校では二年生全員が、瀬戸市内の企業や施設などで三日間の職場体験を行っている。野球部で活躍するN君は活発な性格に見られがち。だけれど、「人としゃべるのは大の苦手」と自分では思っていた。苦手な人付き合いを克服したいと思っ、選んだ職場体験先は保育園と小学校。今日は職場体験の三日目だ。保育園の子どもたちは初対面のN君相

手でも遠慮なく接してくる。最初は戸惑っていたけれど、いっしょに遊んだり弁当を食べたりするうちに、打ち解けてコミュニケーションができていく自分に気付いた。



## ちょっとした体験が中学生たちの心を動かした

- ◆◆「マナー講座」で学んだ
- ◆◆挨拶やお辞儀の仕方
- ◆◆職場体験で実践してみた

「N君は挨拶がしっかりできるところがいい。このまま一週間くらいはいいな」。職場体験の初日と二日目に訪問した小学校で、N君は担当教師から冗談めかしてほめられた。体験前のマナー講座が生き生きしているのを感じる。

職場体験の一カ月ほど前に行われた「マナー講座」。挨拶の仕方、敬語の使い方、お辞儀の仕方などを身につけて、職場体験をより有意義なものにするのだ。「いつもどうも。店長さん、いる。」を丁寧になんて言うの？」「電話が鳴ったら左手で受話器、右手でメモを取って」。校外から派遣された「市民講師」の言葉に真剣に耳を傾けた甲斐があり挨拶はほめられた。

しかし敬語は難しい。体験先ではもちろん、体験後にも使ってみようとしたけれど、なかなかうまくいかない。社会に出るまでに学ばなきゃいけないことは、まだまだたくさんある。

N君と同じく、保育園で職場体験をしているTさん。もともと小さな子どもが大好きで、その延長で先生役をこなしている。Tさんはお父さんの仕事ぶりやテレビドラマを見て「仕事ってタイヘンそう」という印象を持っていた。だけど子どもたちと過ごすうちに「仕事はおもしろい面もあるんだな」という気持ちに。「こんなに楽しいなら、保育士を目指しちゃおうかな」。







## 子どもたちの成長にひと役買う 市民講師や地元企業の力

- ◆◆ オヤジが何を考えて
- ◆◆ 仕事をしているのか
- ◆◆ 今度聞いてみよう！

「仕事はお金を稼ぐ手段。家族を守るために仕方なくやるもの」。祖東中学校で生徒会の会長を務めるM君は、仕事に対してそんな考えを持っていた。彼の職場体験先は瀬戸商工会議所。担当者に付いて、企業や学校との打ち合わせに参加したり、空いた時間にパンフレットの製本などの雑用をこなした。

ワクした印象を持ち始めたM君。製本の作業も、人の役に立っていると思つて「生懸命やれば達成感がわいてくる。仕事つて、けっこう楽しい。」

「もしかしらたらお父さんも、僕たちに言わないだけで、毎日楽しみながら仕事をやつてるのかもしれない」

職場体験を終えるころには、そんな風に考えられるようになっていた。親が参観日に子どもの勉強ぶりを見に来るように、父親の職場を訪問して、仕事ぶりを見学するチャンスがないかと狙っている。

- ◆◆ 体験先企業の社長が
- ◆◆ 働くことの意味を
- ◆◆ 教えてくれた！

陶器メーカーの作業場で正月用のインテリア小物を箱詰めするS君は、昨日までとはちよつと違う意識で仕事を進めていた。

「単純作業だけど、どの工程が欠けても商品は成り立たないんだよ」「二つ不良品があると、百個ぜんぶが返品されてくる。会社の利益が減るのはもちろんだし、環境に

- ◆◆ 「職業講座」の授業で
- ◆◆ 教えてもらったことは
- ◆◆ やつぱり本当だった！

M君と同じ瀬戸商工会議所で職場体験を行ったFさんは、一月前に行われた「職業講座」を思い出していた。祖東中学校が職場体験の事前授業として取り組んでいるもので、いろんな職種の人を講師として招き、「仕事とは何か」を実体験をもとに語ってもらっている。

「隣の人と手をつないで」

「職業講座」で講師からの突然の指示に、Fさんは戸惑った。異性とはもちろん、同性

の友人と手をつなぐのも、なんだか気恥ずかしい。だけど照れながらも、手をつないでみる。

「人間は一人では何もできないんだよ。人とコミュニケーションをすることで、何かが生まれてくる。それは仕事も同じ」

瀬戸商工会議所で職場体験をしながら、一月前に聞いたあの言葉が実感されてくる。瀬戸商工会議所の担当者、企業、学校の打ち合わせは、利害関係というより、人と人とのつながりで進んでいるように見えた。将来はデザイン関係の仕事に就きたいと思つているけれど、きつとどんな仕事でも人間関係は大切なんだろうなと思う。

## 事前授業と事後の振り返りで 職場体験がもっと効果的に

- ◆◆ 職場体験を通じて子どもたちに
- ◆◆ エールを送り続ける
- ◆◆ 大人たち、そして瀬戸の町

祖東中学校の二年生八十一名の職場体験は、さまざまなエピソードを残して終了した。ステーキハウスの厨房で調理中に軽く指を切ってしまった生徒、地元FM局の電波に自分の声を乗せた生徒、山の中腹にある牧場で早朝から夕方までげそりしながら動物の世話をした生徒……。一人ひとりが学校生活では得られない経験を積んだ。その背景には「地域の子どもたちを何とかしてあげたい」という思いを持った大人たちが多く、瀬戸市の地域性が深く関係する。先述したS君の受け入れ先企業の社長もそ



の一人。祖東中学校の職場体験は、そんな熱い大人たちに支えられている。

また二年生のキャリア教育を担当している中村公城教諭は、「楽しかった、ツラかったで終わるのではなく、生徒たちが感じたことをきちんと消化させてあげるのが、次の一週間の勝負だと思つています」。職場体験後のフォローの大切さを語る。

職場体験の翌日には、全員が体験先にお礼を言い、翌二月には保護者や体験受け入れ先企業、教育委員会などを招待して、クラスの代表が発表した。生徒たちの感動体験が将来について考えをきっかけになつてほしいと、瀬戸の町全体が期待している。





# こんなのできた！ キャリア教育 の足跡

職場体験などのキャリア教育で子どもたちが関わってできた成果物を大公開。一つひとつのアイテムに思いが詰まっている。

## 生徒たちの成長の証

### 感想文

瀬戸市キャリア教育の事務局的な活動をする瀬戸商工会議所には、「マナー講座」「生きがい・働きがい講座」「職場体験」などが行われるたびに、児童や生徒たちからイキイキとした感想文が届けられる。



## キャリア教育の 学びがぎっしり

### 職場体験学習レポート

祖東中学校の2年生全員分の職場体験の様子がまとめられた1冊。冊子には、各自が事業所で体験した仕事内容だけでなく、体験で心に残ったエピソード、瀬戸で働く大人たちから学んだ「働く意味」などが、思い思いに綴られている。用紙いっぱい書かれたレポートの文面からは、職場体験が生徒たちにとって将来、社会に踏み出す勇気と地元への理解につながったことが伝わってくる。



## 単純作業も立派な思い出 おみやげパンフレット

瀬戸商工会議所での職場体験で製本作業を手伝って仕上げたパンフレット。体験した生徒は「また1人多くの観光客に、このパンフレットを見てもらえる」という気持ちで取り組んだとのこと。



## 園児とじゃれ合うきっかけ 毛糸のボール

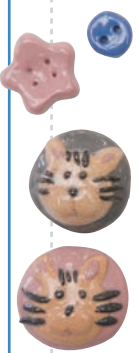
職場体験先の保育園で、生徒が園児に作ってあげたもの。こういったアイテムをきっかけに、小さな子どもたちと打ち解けてコミュニケーションができるようになった。

本山中学校では…



## 生徒が自作販売！ オリジナル焼き物

『もとやま工房2008』で販売するために、本山中学校の生徒たちが作った置物たち。今年は「陶のまち瀬戸のお雛めぐり」で販売するため、お皿や花瓶の他に雛人形も製作した。



瀬戸市立本山中学校教諭の中崎毅さん(右写真・中央)。2006年同中学校に赴任すると、「もとやま工房」の構想に着手。2学期から具体的に準備を始め、翌年3月には生徒たちによる陶器の製造&販売学習を実現した。前勤務先の八幡小学校でも「お店を出そうプロジェクト」を手がけた敏腕教師。

## キャリア教育から生まれたもう1つの物語

# 瀬戸焼の製作&販売で「商業」体験 本山中学校の『もとやま工房2008』

市場調査や広報活動まで生徒たちが分担して実施

「ウサギの置物にヒゲ生えてる、かわいい。いくらで売る?」「100円くらいじゃない?」「自分たちで製作した焼き物に、「つひとつ」値段を付けているのは、本山中学校2年生の生徒たち。2月下旬の「もとやま工房2008」に向けて最後の準備に取りかかっている。瀬戸市立本山中学校では、2年生が「もとやま工房」という会社を立ち上げ、焼き物の製造・販売を行う実践学習を行っている。今年はその二年目。このプロジェクトの中心になって活動しているのが、社会科教諭の中崎毅さん。「単に焼き物を作って売るだけじゃなくて、「商業」をいろんな角度から体験させてあげたいと思ってるんですよ」と、人なつこい笑顔で語る。

「もとやま工房」の活動は幅広い。メインの仕事となる陶器作りの他に、「どうやれば売れるか」を考える経営戦略、地元マスコミへの広報活動、町のショップなどで売れ筋陶器を調べる市場調査、デザイン画の描き起こし、宣伝ポスターの制作、店のレイアウト計画…など。販売日の直前には地元で活躍する販売のスペシャリストを招いて、販売員としての心得や接客のノウハウを学ぶ。「今年は原材料費や交通費など、かかった費用をぜんぶ記録しているので、売り上げだけじゃなくて利益率も算出できます。これを見せてあげるのも勉強ですよ」と、中崎教諭は「もとやま工房」の活動を通して、さらに生徒たちが社会を「実感できる」機会を広げている。

瀬戸焼を教材にしないともったいない!

本山中学校に赴任する前は、瀬戸市立八幡小学校で教壇に立っていた中崎教諭。実はこのときも「お店を出そうプロジェクト」を立ち上げている。児童たちが紙ハックでコースターを作り、専門家に陶器作りを学び、商店街の空き店舗を借りて販売を行った。中崎教諭が異動した後も継続して行われ、三年目の活動を終えた平成十九年度、この取り組みは文部科学大臣表彰を受けた。「授業中に言葉で教えて頭で理解するのは、実際に体験するのでは全然違うんですよ。幸い瀬戸には「焼き物」という文化があって、どの学校にも窯があるので、これを取り入れない手はないですよ」

そんな中崎教諭が苦労したのは時間の確保。総合的な学習の時間の多くは修学旅行の準備や文化祭の合唱練習などに充てられる。「今は時間がないなりに、デザインを考える生徒、宣伝を担当する生徒と役割分担しながらやっています」。もちろん時間があれば様々なことに挑戦できる。しかし中崎教諭は「限られた時間の中で、いかに工夫して仕事を進めていくかも、働く上では重要なこと」と、キャリア教育の環と捉えて活動を進めている。「もとやま工房」の活動は「ユース番組や地元FM局で取り上げてもらう機会も多く、生徒のやる気も高まる。昨年は約三万円の売上金で、学校用の椅子を購入。これも生徒たちが話し合って決めた。今年の生徒は利益を何に使うのか。中崎教諭の楽しみの一つだ。





### 教師・保護者・支援者の

2年生がマナー教育を受けるのは、翌年の高校受験に向けての面接試験対策という観点からも、タイムリーなんです。言葉遣いがよくなったのを感じます。  
(祖東中学校：増田登教諭)

職場体験で「働くことの意義」を少しでもわかってもらえればと思っています。瀬戸の地場産業である陶磁器産業を見てもらうという意味でも、今後も協力していきたいですね。  
(職場体験受け入れ先企業：担当者)

市民講師を依頼すると、中には仕事を休んで来てくれる方もいるんです。みんな瀬戸の子どもの未来のために、同じ方向を向いているんだなと感じます。  
(コーディネーター：山田素子さん)

私たちの保育園に職場体験に来てくれたふたりは本当によくやってくれました。子どもたちの中にすーっと入って行ってきて人気者でした。もっといてほしいくらい！  
(職場体験受け入れ先企業：担当者)

私自身、中学生の娘を持つ母親ですが、この時期に「仕事」や「働くこと」の大変さを知るというのは、非常に重要だと思いました。発表会では皆さん、いい顔をしていて、この経験が生徒さんにとって意義のあるものであったことを感じました。  
(職場体験受け入れ先企業：担当者)

だらっとした子が緊張感持ってやっていたり、おとなしい子が明るく振る舞っていたり。職場体験では、普段の学校生活では見えない生徒の表情が見えるのもうれしいですね。  
(祖東中学校：中村公城教諭)

### 子どもたちの

「努力することを忘れちゃいけない」「命をかけて命を守る仕事」「すべてに気持ちを込めて」。生徒たちは職場体験を通じ、多くの働く大人に出会い、多くのメッセージをもらった。

職場体験で人とのつながりの大切さを知りました。これを生かして学校生活を送っていきたいです。

自分が笑うと相手も笑ってくれるとか、考えたこともありませんでした。普段から気を付けようと思います。

機械でモノを作るより手作りの方が、ありがたみや気持ちが相手に伝わるんだなあと思いました。

職業講座で「一生懸命やれば何でも楽しいんだよ」と言われたことを、職場体験で実践できました。

「ぜひ看護師になってね」。体験先の看護師さんにももらった一言が、夢に向かう大きな励みになりました。

職場体験で作った和菓子を食べた祖母から「おいしい!」と言われ、人に喜んでもらうことが、こんなに嬉しいとは思いませんでした。



# 授業実施スケジュール

## 授業内容

### step 1 働くって、仕事って何だろう 動機付け

【職業調べ＆職業新聞作り】  
なりた職業のイメージを膨らませるために、まずいろいろな職業について調査。自分になってみたい職業を選び「職業新聞」を作成する。

【生きがい働きたい講座】

「働くこと」とはどういうことをテーマに市民講師が講話。平成十九年度、祖東中学校では瀬戸職業安定所の職員の方が、フリーターにならないために早い時期から情報を収集し、体験を重ねていこうとエールを送った。

### step 2 やりたいことの言語化

【SOT（ハローワーク）】

どの職場体験に行くかを決めるために、疑似ハローワークを実施。生徒たちは「求職申込書」に必要事項を記入して、行きたい職場の希望を提出。応募が多数の場合は、申込書の内容で合否が決定する。

### step 3 社会人としての意識づくり スキルトレーニング

【職業講座】

社会で働く地域の皆さんを市民講師として教室に迎え、それぞれの職業や仕事に対する情熱、思いについての話をしてもらおう。祖東中学校の職業講座では、会社社長、看

護師、新聞記者、保険営業の方などをお招きしたが、講師の職種はさまざま。生徒たちにはどの職種の講話を聞きたいかを事前にアンケートをとり、五十分×二コマで希望の講座を二種類受講できるようにした。

【マナー講座】

職場体験の二カ月ほど前に、会話や言葉遣い、電話のかけ方、挨拶の仕方など、社会人としての基本的なマナーを身につける講座を実施。祖東中学校では、瀬戸で働く市民講師の方を三人を招いた。

### step 4 事前学習を活かして 実践

【職場体験】

生徒たちは実際に職場を訪れ、その道のプロの下で入門的な作業をし、現場で働く大人たちの生の声を聞く。祖東中学校では約三日間にわたり、二年生八十一人が六十カ所の職場で体験学習を実施。できるだけ自分の力でやり遂げることができるよう、二つの事業所には二人で行くのを基本とし、多くても三人までとした。

### step 5 体験だけで終わらせない ふりかえり

【職場体験学習のお礼】

体験を終えた次の日には、お礼の手紙を持って再度、職場体験先を訪問。感謝の気持ちを述べる。

【クラス発表会】

職場体験学習をレポートにまとめ、まずはクラスで発表会を実施。発表の仕方や内容などをもとに採点をして、職場体験学習発表会のクラス代表を決める。また、各自まとめたレポートは冊子(約百七十ページ)にし、職場体験を受け入れてもらった全事業所に配布する。

【職場体験学習発表会】

クラス発表会で選ばれた代表者が発表。保護者や職場体験の受け入れ先である事業所の担当者、教育委員会、商工会議所、さらに翌年に職場体験を控えた一年生も発表会を見学する。司会・進行はすべて生徒たちで行い、代表者のプレゼンテーションではパワーポイントを活用。その後、質疑応答を行う。

祖東中学校の職場体験は、事前学習と事後のサポートに力を入れているのが特徴的。瀬戸市全体のキャリア教育を瀬戸商工会議所が事務局としてとりまとめることで効率的に教育効果を上げることにも成功している。

## 授業実施ポイント

●まず、生徒たちにこれから取り組むキャリア教育について説明する。その後、今後の授業に意欲的に取り組めるよう、「職業調べ＆職業新聞作り」や「生きがい働きたい講座」といった活動を実施。生徒たちのモチベーションを高める。こうした活動は一年生で行っても良い。

●「職業調べ＆職業新聞作り」では、世の中にある多種多様な職業について、その一端を、調査活動等を通して知るところを学習の目標にする。

●「生きがい働きたい講座」では、人生の先輩である大人たちに、講座名の通り、生きがい・働きたいについて講話をいただく。人選のポイントとして、人事や求人・求職支援に従事する方を招くと、生徒たちは職業の大変さと同時に、仕事の楽しさを知り、考えを深めることができる。

●事前準備として

・年度初めにスケジュールを確認  
瀬戸市のキャリア教育は、学校間と「デイ・ネーター」である瀬戸商工会議所とで全体像を共有。最初に年間の予定をすり合わせておくことで、授業の進行がスムーズになり、地域の支援者等からのサポートが得やすくなる。

・講師のリストラップ  
「生きがい働きたい講座」をはじめ、職場体験を深めるさまざまな講座で講師を務める方は、すべて瀬戸市のキャリア教育に協力してくれる市民の人たち(市民講師)。祖東中学校では講師の依頼の際、リストを持つ瀬戸商工会議所の協力を得た。

●「求人票」を廊下に貼り出し、「求職申込書」を提出してもらおうなど、ハローワーク風に職場体験先を決めることで疑似就職活動を体験させる。

●「職業講座」では、大人たちから働くプロフェッショナルとしての経験などを聞くことで、子どもたちの職業についての知識や考えを深めさせる。こうした実際の経験談を聞くことは「生きがい働きたい講座」同様、仕事の大変さや楽しさについて考える機会になる。

●「マナー講座」では、これから職場体験に臨む生徒たちに、体験先での学習効果を高めるためのコミュニケーションの基礎を学ばせることがねらい。「社会に出る」という動機づけにもつながる。

●事前準備として

・講座に招く講師の方とは、しっかりコミュニケーションを取る。電話やメールのやりとり、お礼状の送付など、基本的なことをマメに行うことで信頼関係を構築。授業後に「うまく話せなかった」と落胆する講師の方には、勇い言葉を。  
・講師の方が配る予定の資料を事前にコピーしておいたり、「スクリーンが使いたい」「CDプレイヤーが必要」など講師の要望をヒアリング・確認しておく。講座当日はスムーズ。



●職場体験に行く前に、生徒たちに「体験先で何を学ぶのか」という課題を持たせる。なお体験中は、その日に学んだことをふりかえるために日誌等を書かせることで、体験後のふりかえりにつなげる。

●事前準備として

職場体験先との交渉は、主に学校で実施。しかし学校の持つネットワークでは受け入れ先が限られたり、新規で依頼をする場合に交渉が難航する場合も。そこで瀬戸市のキャリア教育ではこの企業は受け入れてくれそう、「この施設は難しい」などの事前セッションを瀬戸商工会議所でサポート。学校側の作業が軽減され、なおかつより幅広い多くの仕事を生徒たちに体験させることができる。こうした受け入れ先の企業・事業所リストは、祖東中学校以外の瀬戸市内の学校でも職場体験の際に利用されている。

●お礼状を書き、レポートをまとめ、発表することで、職場体験を生徒たちの記憶として定着させるのがねらい。職場体験の日からあまり間をおかずに実施するのがポイント。

●職場体験の成果発表会では、生徒たちそれぞれの体験を、クラスや学年で共有できる良さがある。また発表するための準備・発表することそのものを通じ、生徒たちはプレゼンテーション力も身に付く。

●職場体験学習発表会には一年生も参加させることで、職場体験への期待が高まり、取り組みへの心構え・意識が変わる。



事前学習 [約7時間]

体験 [約半日~5日]

事後学習 [約5時間]



# 雑誌制作という仕事体験から見えた「働く意味」

## 情報コミュニケーションを学ぶ ◆◆ 渋谷区立鉢山中学校・世田谷区立砦中学校(東京都)

地域で働く大人や仕事を紹介するフリーペーパー制作カリキュラム。通称『job job(ジョブジョブ)』。広く産業界で働く大人たちに取材する「インタビュ活動」から、読み手を意識して制作する「ものづくり体験」まで含むこのカリキュラム。平成十九年

度は、東京都内の中学校七校が取り組んだ。この中から各学年一クラスという渋谷区立鉢山中学校の一年生三十五人と、区内でもマンモス校と言われる世田谷区立砦中学校の二年生二八九名の、対照的な二校の取り組みから見えた生徒たちの姿を紹介する。



### 「仕事のプロ」とのやりとりは、生徒たちの未来を刺激した

#### ◆◆◆ 仕事・働く・社会を知る入口 ◆◆◆ 中学生による職場体験情報誌 ◆◆◆ 『job job(ジョブジョブ)』

中学生が地域で働く大人を取材して知った、仕事の厳しさや喜び、働くことの意味……。これらを生徒たちの手によって、フリーペーパーという形にまとめたものが、仕事体験記『job job(ジョブジョブ)』だ。『job job』づくりのコンセプトは、「仕事とは何か」「働くとは何か」。このキーワードをもとに、誰に向けて、どのように伝えるか、生徒たちの思いやこだわりが最も表れるところである。例えば「夢」実現をテーマに、仕事の内容を分かりやすく読み手に伝えるため、働く大人との取材のやりとりだけでなく、こだわりの道具等も紹介した『job job』。学校のある

街を多くの人に知ってもらいたいと、体験先の取材レポートに地域の特徴を絡めた『job job』。さらには修学旅行先で日本の伝統技を受け継ぐ職人たちの取材し、同年代の中学生たちに幅広い仕事を伝えたいという思いを込めてつくった『job job』。同じキーワードで制作しても、ターゲットや構成の違いで、各学校ならではの「色」が出るから面白い。これを見れば平成十九年度、東京都内の中学校七校・約五七〇名が取り組んだこのカリキュラムで、生徒たちがいかに多くの働く大人たち、共に制作するクラスの仲間、プロの編集者、デザイナーとコミュニケーションをかわしてきたかがわかる。そこで制作過程の中でも、より生徒たちのこだわりがぶつかり合う「表紙のデザインを決める」授業を見に、渋谷区立鉢山中学校を訪れた。

#### ◆◆◆ 『job job』をつくる ◆◆◆ 目標に向かう上で ◆◆◆ 大人も子どもも関係ない

初めて見る「デザイナー」の姿に、教室には緊張感が漂っていた。しかも「デザインとは何か」「雑誌における表紙の意味・役割」といった未知の世界の話に、最初は少々困惑した様子を見せる生徒たち。ところが、生徒一人ひとりが描いた表紙の図案から、自分たちが目指す『job job』のイメージに合う案を全員でついに絞り込んでいく活動をスタートすると、次第に生徒の表情がゆるみ始める。

「この表紙の意図は？」「それぞれの夢が膨らんで、飛んで行くような感じ！」「んじや、このしゃぼん玉みたいなものが『夢』で……全体の色は？」「水色。うーん、やっぱり白」。「これはイラスト？それとも写真にするのかな」。こうしたデザイナーと生徒たちとのやりとりが時間。自分たちが考えた表紙のアイデア一つにも質問や意見を返すデザイナーに、生徒たちは「大人」になった気分だった。

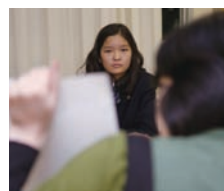
デザイナーとのやりとりから、形にすることの面白さや、表紙からも自分たちの思いを伝えることができることを生徒たちは知った。そして、休み時間になると生徒自ら、デザイナーや制作をサポートする編集者の傍に駆け寄り「私が取材した幼稚園の名前が鷺だから、仕事紹介のページは鷺色にしたいんですけど」と提案したり、スケッチブックを覗き込みながら「コレは何の雑誌の

絵ですか？」と話しかける姿も見られた。

さらに放課後には、中心となって制作を進めるクラスの代表者「編集委員」五人とデザイナー、編集者、コーディネーターによる話し合いがもたれる。編集委員は、クラス内で決めた誌面全体の構成や各ページの内容、表紙案等をより具体的に決定していく。編集委員は制作の代表者として、最終的に『job job』を形に仕上げる役割が任されている。クラスみんなからの信頼を受け、編集委員は、プロたちとバトルを繰り返すのだ。







## 「自分がやるべきこと」を意識する

◆◆◆意欲の高い二年生  
◆◆◆相手を思いやれる二年生  
◆◆◆各学年ならではの良さがある

『job job』づくりも三年目となった鉢山中学校。過去二年は、二年生の職場体験に絡めて実施していたが、毎年制作に携わってきた仙北屋教諭は、どの学年で行っても能力に大差がないことがわかった。そこで今年度は、何事にも興味・関心の高い二年生でチャレンジすることを決意。昨年までは小学生だった二年生三十五人にとつて、取材に行くことや、表紙のデザインを考へること、制作の作業ひとつひとつが新鮮だった。特に『job job』の制作を取りまとめる編集委員としては、ページの構成から表紙まで、全体の作業に携われることが何よりも刺激的だったようだ。制作をサポートしてくれる編集者やデザイナー、コーディネーターたちの一言一句も聞きもらさないよう、

編集委員たちは終始、前のめりになってアドバイスを耳を傾けていた。

一方、中学校の編集方針は「興味のもてる紙面づくり」。前年度の『job job』は、二年生約二百名の生徒が書いた全ての記事を掲載することを重視したため、字数が多く、文字が小さくなってしまった。「私たちは書く側でもあり、読む側でもある。去年は書く側の『全部掲載したい』という思いを優先してしまっただからこそ、今年も読んでもらう人をもっと意識してつくりたい」という思いのもと、まずページ数を前年度の九十ページから、半分の四十ページに。全員の記事を掲載するスタンスは変えず、取材を通じて一番伝えたい内容に絞り込む構成にした。今年度の二年生も二百名近い人数とあつて、制作作業もおのずと多くなる。そこで中学校の編集委員会では、委員になったメンバーをさらにデザイン・編集係、原稿入力係というように担当を振り

分けて進めることになった。

放課後、中学校の校内では、編集委員たちが各自仕事に黙々と取り組んでいた。中でも原稿入力係のグループは、他人の手書きの原稿を二文字一句正確に打ち込まなければならぬとあつて悪戦苦闘。一人二人と作業を迫えたメンバーが帰る中、仲間が書いた文字が読めないことに苛立ち、思わず「オレも帰る！」と言い出したA君。しかし、しばらくすると気を取り直して「頑張る気はないけど…明日締め切りだし、もう少しやる！」と、自らの仕事に責任を持つてい

◆◆◆働く大人たちからのメッセージ  
◆◆◆「伝える」責任と楽しさがあるから  
◆◆◆生徒は最後まで諦めなかった

小規模の学校であれマンモス校であれ、『job job』の制作過程で、必ず生徒全員が関わる作業がある。それは「記事を書く」こと。『job job』はフリーペーパーとはいえ、地域の仕事や情報を発信するという点で、必ず誰かに影響を与える。そんな学校以外の人たちの目に触れる緊張感で、生徒たちは記事を書いたり消し、書いては消しを繰り返し返していた。ただ、生徒たちは誰一人として投げ出そうとはしなかった。なぜなら、取材で出会った働く大人たちから「仕事とは何か」「働くとは何か」に対するメッセージをそれぞれ受け取っていたからだ。

小規模の学校であれマンモス校であれ、『job job』の制作過程で、必ず生徒全員が関わる作業がある。それは「記事を書く」こと。『job job』はフリーペーパーとはいえ、地域の仕事や情報を発信するという点で、必ず誰かに影響を与える。そんな学校以外の人たちの目に触れる緊張感で、生徒たちは記事を書いたり消し、書いては消しを繰り返し返していた。ただ、生徒たちは誰一人として投げ出そうとはしなかった。なぜなら、取材で出会った働く大人たちから「仕事とは何か」「働くとは何か」に対するメッセージをそれぞれ受け取っていたからだ。



さか働く大人の真剣な眼差しや仕事をすすむ手、年季の入った仕事道具まで撮つてくるとは…。写真一枚からも生徒が真剣に取材に取り組む様子が伝わり、仙北屋教諭をはじめ、大人たちの顔からは笑みがこぼれた。

書き上がった原稿をパソコンに打ち込む生徒たちの顔は「様に笑顔だ。「早く出来上がらないかな」。高まるワクワク感をおさえられない。『job job』制作というもう一つの「仕事」をやり遂げた時、生徒たちは「働くとは何か」という答えに近づいた。

## 「働くって何だろう」 職場体験を経て、生徒たちは答えに近づいた





# 制作への思い高まる キャリア教育 の足跡

取材したことをどう発信すると、読み手に伝わるのか。生徒たちは考え、悩み進むなかで、次第に形になる喜びを感じていた。

## 編集作業も大詰め

### レイアウトシートとフロッピー

編集委員がデザイナーに依頼し、作成された誌面のデザイン(レイアウト)を見ながら、手書きの原稿をパソコンに打ち込む。通常は取材に行った仲間同士で順番に打ち込むが、人数が多い砧中学校は「原稿入力係」を決め、編集作業において役割分担した。また取材時に撮った写真も内容に合わせて選別。原稿のデータをフロッピーディスクに入れる。



## 『jobjob』の前身

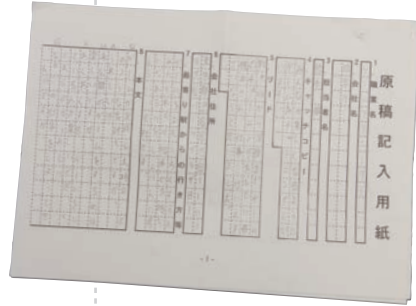
### 職業体験便覧

鉢山中学校では『jobjob』制作に取り組み以前から「職業体験便覧」という形で、各自生徒が職場体験の様子をレポートにまとめて冊子にしていた。これは言わば、『jobjob』の前身。もともと学校で行っていた活動に「作成する目的」と「読み手を意識する」視点を取り入れただけで、内容も生徒の制作への意識も変わる。

## 読み手を想像しながら書く

### 原稿

教師は誌面のレイアウトをもとに「どんな内容が」「何文字必要か」を割り出し、原稿を書き込むシートを用意。生徒は各自シートに沿って取材した内容を記事にしていく。『jobjob』制作では、生徒ひとりひとりに原稿を書かせることで、制作における責任感を持たせるねらいがある。



## 取材したネタがぎっしり

### 職場体験日誌

今回、砧中学校では『jobjob』制作を2年生で実施したため、職業体験とからめて取材を実施。生徒たちは仕事内容をはじめ、仕事の厳しさや喜び、働く上で大事にしていること等を取材した。その後、実際に仕事を体験し、身をもって感じたことで、単なるイベントにとどまらない体験となったことが日誌から感じられる。



## 『jobjob』の「顔」を決める

### 表紙のイメージ案

「働くとは、仕事とは何かを伝える」という冊子のコンセプトと、取材を通して生徒が各自で感じたことをもとに、まず各自でイメージ案を描く。生徒たちが考えた表紙案には子どもたちらしい発想の中に、仕事や働くことについて「伝えたい」という思いが込められている。



## キャリア教育から生まれたもう1つの物語

# 経営者として、働く大人の一人として 子どもたちに今、残せるものは

大森さんと芝野さんが『jobjob』制作に関わるようになり、社内にも変化があったとか。ふたりが授業から帰ってくる「生徒たちの反応はどうでしたか?」と詰めよる社員や、「子どもに嘘はつけない!」と徹夜でデザインを上げる若手デザイナーまで、社内の従業員の仕事に対するモチベーションが上がったそう。制作に関わる大人たちにも刺激となっていることは、仙北屋教諭やコーディネーターにとっても嬉しいことだ。

企業も教育現場も悩む  
若者のバイタリティー不足

平成十九年度の鉢山中学校の『jobjob』制作は、同じ会社で働くデザイナーの大森さんと編集者の芝野さんがサポート。実はこのふたり、会社では社長、副社長としての顔を持つ。今回ふたりが制作に関わることになったきっかけとして、「デザインの価値を伝えたい」という企業理念と授業の趣旨が一致したことと、企業として抱える悩みと重なったという面も大きい。「中小企業というのは正直、少しでも早く従業員を稼げるレベルに鍛え上げないと、あつという間に会社は火の車になってしまふんです。だから人を採用する時にはまず、その人のポテンシャルを見るのですが、最近注意するとすぐ泣いたり、辞めたり。打たれ強い、バイタリティーのある人を求めているのですが」と語る大森さん。その話に頷く芝野さんもまた、従業員を育てる難しさや時間のなさを現場で日々痛感していた。「きつと今までに壁にぶつかつて、乗り越えてきた経験がないんでしょ?」こうして企業を抱える人材教育の問題は、教育現場にも通じる。『jobjob』制作のキキキキキキを始める以前から、キャリア教育を実施してきた鉢山中学校。「今の子どもたちに生きていく『バイタリティー』はあるのか。今のままでは社会では生きていけない。自分で何事も切り開く力をつけたいと思ったのがきっかけです」と話すのは、担任の仙北屋教諭。こうして『jobjob』の制作に取り組みすることになった。

「僕たち、私たちは知っている  
こんな大人もいたことを…」

鉢山中学校の『jobjob』制作において、初の試み。それは、デザイナーが生徒たちの前で「デザインとは何か?」について講義する授業だ。「世の中には目に見えるものだけが仕事ではなく、見えない部分にこそ仕事がある。本づくりに対してデザイナーや編集者は、言わば見えない部分。しかし、こうした人たちがいて初めて、本ができることを生徒に伝えたい」と、以前から生徒に様々な働く大人を見せたいと思っていた仙北屋教諭。デザイナーとしても制作に関わるコーディネーターも同感だった。「『jobjob』を制作するのであれば、限られた生徒(編集委員)だけでなく、生徒全員に関わってほしい。そして働く『プロ』と接する以上、締め切りがあること。一人で守らなければ制作に関わる全員に迷惑がかかること、そして社会で働く上での常識も学んで欲しいと思っただけです」。授業後、芝野さんはこう言った。「デザイナーにはすべて意味がある。例えば洋服を選ぶのも、本を選ぶのも、すべて無意識のうちにはデザインからメッセージを受けている。私たちはそういうものを作る仕事なんです。また、この仕事は、どんなに苦しくても必ず終わる。完成と同時に、達成感も積み重なる。頑張つて壁を超えた経験は、必ず自分の努力を信じられる力になると思います。」そして「私たちと過ごすことが生徒たちの未来に役立つなら長髪でもヒゲでも、授業に参加しますよ」。大森さんは笑っていた。





## 教師・保護者・支援者の声

## 子どもたちの声

取材、撮影、執筆、デザイン…。『jobjob』を作るという「仕事」を体験したことで、生徒たちは本当の意味での働くことの面白さや責任、達成感をひとりひとりが身をもって感じた。

これから美容業界を目指す若い人たちに對して、いつまでも憧れられる業界、そして働く大人でありたいと、仕事に対する責任感や、美容業界を自分たちが盛り立てていかなければという使命感がうまれました。こうして中学生の生徒さんが職場体験やインタビューに訪れるようになって、スタッフたちの仕事に対する意識が高まったように思います。生徒さんが作った『jobjob』はお店のフロア内に置いて、仕事の励みにしています。  
(体験受け入れ先企業：担当者)

渋谷に店を構えて約40年。鉢山中学校の卒業生がスタッフにいることもあって、地域と母校に貢献したい思いから毎年、こうした授業の受け入れを行っています。生徒さんたちとのやりとりから刺激を受けることもさることながら、お客さんから「『jobjob』見たわよ!」と言われるようになり、おかげさまでより地域の人々やお客さんとのつながりを持つことができ、嬉しく思っています。  
(体験受け入れ先企業：担当者)

『jobjob』づくりでは、主に地域の商店街を中心とした職場を体験したことによって、生徒たちは地域の人たちと真剣にやりとりし、189名全員が原稿を書きあげました。外部のお力添えもあって、学校ではできないさまざまな体験ができ、生徒にとって充実した時間になったと思います。  
(砧中学校：吉田裕行教諭)

人数が多いと、生徒によっては周りを気にして自分の意見を飲み込んでしまう子も出てきます。今後こうした授業を行う上で、もっとディベートをする時間を取り入れて、自分たちの考えをどんどん発信していけるといいなと思います。  
(編集者：柴田真希さん)

仲間やその世界のプロの人と意見をぶつけ合いながら、決められた期限の中で、『job job』を作り上げます。言葉、写真、デザイン…すべてが自分の想いを伝えるために重要で、カタチにすることとても価値があります。中学生の感性と大人の愛と情熱が、1冊の中にとじこめてあります。  
(コーディネーター：安井綾子さん)

砧中学校で担任の先生や外部講師の方のサポートを始めて2年がたちました。学校では普段の授業等にも『jobjob』づくりを取り入れて下さっていることもあって、毎回とても進めやすいです。また学校の先生方には、地域コーディネーターである私たちをいつも温かく受け入れていただき、信頼をおいて下さっているおかげで、より生徒さんや外部講師の方と深く意見を交わしながらつくることができて、ありがたく思っています。  
(NPO法人世田谷まなびばネット：小島孝子さん)

編集の仕事は思っていたよりもおもしろくて、自分の考えた案がみんなに選ばれたときは、すごくうれしかったです。すごく貴重な経験になりました。

一人ではフリーペーパーは作れないことを知った。いろんな人が手助けをし合いながら、作っていくものであることを知ってすごいなと思った。

駅前などにあるフリーペーパーをまさか自分たちで作るなんて思ってもみませんでした。とても良い作品、経験になりました。

今までの『jobjob』と違って、読みやすい、鉢山をアピールできるものを作りたいと思いました。どんどん形になっていくと、もっといいものが作りたくなりました。小学生や同じ年代の子、この地域のことを知らない人たちに、みんなそれぞれインタビューした仕事のことが伝わるといいなと思います。

先生から「男子の目線も必要だから」と言われて挑戦してみることにした編集委員。雑誌のデザインや構成は女子が得意とするものと思っていたので最初は抵抗があった。委員になってみると男女の意見の違いもあったが、積極的に意見交換して深めることができた。こうして話し合いながらいろんなことが磨かれていくんだなと思った。



# 授業実施スケジュール

## 授業内容

### step 1 「働くこと」と「これからの社会」について学ぶ オリエンテーション

仕事や社会に対して目を向けるため、現在の社会情勢を踏まえながら、キャリア教育がなぜ必要なのかを伝える。さらに、さまざまな業界で働く大人を外部講師として招き、「なぜ大人は働くのか」について考える。

### step 2 制作工程、関わる仕事について知る 雑誌制作とは

「雑誌、フリーペーパーとは何か」どのようにして作られているのかといった雑誌制作に必要な基礎知識や制作工程、情報産業の概要を学ぶ。さらに、情報産業に携わる人々を外部講師として招き、情報産業において多種多様な職種があることや、必要とされる能力、働く上での思い等を聞く。

### step 3 マナーとコミュニケーションスキルを身につける 取材・撮影の仕方

フリーペーパーを制作する意図、作り方を知ることで、取材・撮影が制作上のカギを握ることを再確認する。まずは具体的な取材方法や心得、マナー等を学ぶ。写真に関しては雑誌における写真の意味や撮り方を学ぶ。これらを踏まえ、今回の「job job」では、何を伝え（コンセプト）、誰に読んでもらうためのものか（ターゲット）を全員で考える。決めた方向性をもとに、取材ではどんな内容を、どのような構成で入れるのか。そのためにはどんな写真が必要かを決め、誌面構成レイアウトや取材での質問内容を固める。そして具体的な取材先を探し、アポイントメントを取る。

### step 4 取材・撮影をしよう 職場体験

誌面の構成に基づき、職場体験先で取材を行う。フリーペーパーの記事となるネタを取材し、具体的な仕事内容や働く人の思いに触れ、仕事や働くことに対する理解を深める。取材後は、協力してくださった方々にお礼状を書く。

### step 5 必要なデザイン、ITスキルを学びながら作成 フリーペーパー制作

取材してきた多くの材料から、「job job」のコンセプトやターゲットをふりかえり、どれが読み手にとって魅力的な材料かを考え、選び、整理する。  
「表紙を考える」  
表紙案はコンセプトや取材で感じたこと等をふりかえりながら、まず各自で考え、グループで代表を選び、最終的に絞り込む。

「記事を書く・写真を選ぶ」  
編集者・デザイナーに編集委員の生徒から発注しておいたレイアウトの文字数に合わせて、各自で原稿を書く。原稿が書き上がったら共に取材・体験したグループで、編集作業に入る。使用する写真を選び、パソコンで原稿を打ち込んでデータ化する。  
「文字校正をする」  
自分たちが書いた記事や、選んだ写真が読み手を意識したものに仕上がっているかを外部のプロに確認してもらおう。チェックを踏まえ、記事を完成させる。  
「記事の仕上げ」  
作成した原稿を取材先の方々にチェックしてもらおう。いただいた訂正等を反映して最終校正を行い、原稿を入稿する。

### step 5 ふりかえりをしよう 発表会・フリーペーパー配布

取材したグループごとに完成したフリーペーパーを見ながら、各自の体験や取材から学んだことを発表。配布先も生徒たちで考え、自分たちの手で配り、最後に授業の総括を行う。

## 授業実施ポイント

中学生による職場体験情報誌「job job」の制作には、広く産業界で働く大人たちとの出会いがある。生徒たちは制作を通して、「知る」「話す」「考える」「創る」「動く」「想う」等の体験を獲得し、仕事におけるコミュニケーションの必要性を実感する。

● 資源の枯渇、少子高齢化、外国人労働者の流入等といった現実問題に触れることで、「将来どのように生きていくのか」を自分自身でしっかりと考える必要があることに気づかせる。  
● 実際に働く人の話を聞くことで、具体的にどんな価値観を持って働いているのかを生徒各自で考えさせる。

● 雑誌制作の説明では、テレビ、インターネット、ラジオ等と比較しながら説明をする。生徒は制作の特徴や関わる仕事について掴みやすく、今後「job job」を具体的に作成する上で進めやすい。  
● 外部講師の手配。手配が難しい場合は、働く大人を紹介するドキュメンタリー番組等（VTR）を準備し、見せるのも良い。

● 教師や外部講師、コーディネーター等が、取材の悪い見本と良い見本を実演すると理解しやすい。  
● 見本を示すだけでなく、実際に生徒たち取材のロールプレイングをさせることで、取材への期待感や安心感を持たせることができる。  
● 取材先は学校にあるデータベースで調べて決めたり、生徒たちに探させて決めるのも良い。

● 準備が重要。取材・撮影時の心得をまとめた用紙を準備する。  
● 事前に準備すること  
① 準備が重要。取材・撮影時の心得をまとめた用紙を準備する。

● 「取材」取材先の下調べ、質問内容をまとめる。  
● 「撮影」持つて行くカメラを使って事前に練習。  
● 取材当日は時間厳守。取材先では挨拶と取材・撮影内容を説明する。  
● 相手の良さを引き出す。  
● ③ 材料をたくさん得る。  
● 「取材」職場体験中も取材中も、相手の話や周りの様子等のメモを取る。  
● 「撮影」決められたショット以外にも仕事道具や看板、ディスプレイ等、面白いと思ったものを撮る。



● 職場体験や修学旅行などの学習活動を利用すると、体験だけに終わらず、活動がより深まりやすい。  
● 事前に準備すること  
初めてつかう事業所の場合は特に、教師は手分けして連絡や訪問等をしておく。  
● 取材後すぐにまとめさせることで、生徒の記事を書く作業がスムーズになる。  
● 構成する各パーツの意味を説明。  
● ① タイトル：記事で伝えたいことを凝縮した言葉。取材者が言っていた仕事に対する印象的な言葉をもとに考えると作りやすい。  
● ② リード：記事の入口になる文章。本文にうまく読み進められるように、取材先の概要をまとめる。  
● ③ キャプション：写真内容を説明する文章。

● 「イラストなのか写真なのか」「全体の色合いは」等、イメージをより具体化するのために、生徒とやりとりを重ねる。  
● 事前に準備すること  
パソコンルームの確保。データ化した記事を保存するフロッピーディスク等。

● 取材に協力していただいた企業をはじめ、保護者や地域の商店街、近隣の小中学校等に配布することで、学校と地域、家庭をつなぐ。

### 編集委員会の内容と動き

雑誌制作が、複数の工程と職種によって成り立っていることを意識させるために、編集委員会をつくる。委員は制作の代表者となり、生徒の意見や記事を取りまとめる制作を進める。

● 全体のコンセプト・ターゲットについて決める。  
● どんなフリーペーパーにしたいのか、誰に読んでもらいたいのか、全員の見解をつまとめる。

● 誌面のレイアウトを考える。  
● プロの編集者やデザイナーからアドバイスを受けながら読みやすさや伝えたいことを考慮し、アイデアを出し合い決める。  
● 表紙の打ち合わせをする。  
● コンセプトに基づいた表紙のタイトルを考える。体験での思い出や、伝えたいことを盛り込んだ多くの言葉からついに絞り込む。クラスで選ばれた表紙案を、プロのデザイナーにアポイントメント。デザイナーとやり取りを重ね、表紙の詳細を決める。

### 記事以外のページの制作 (扉、編集後記等)

● 学校や地域の紹介、フラスの意識調査、制作の足跡、後輩へのメッセージ等、全体のコンセプトをもとに編集委員が自由にテーマや構成を考え、記事を書く。

事後学習 [約7~10時間]

体験学習 [約2時間~数日]

事前学習 [約9時間]



# 地域を知り、自らの未来を見つめる

## 社会の一員であることの自覚 ◆◆岩手県立大東高等学校・宮古商業高等学校(岩手県)

一関市の大東高等学校では、情報ビジネス科の一年生四十人が、地域と自分の将来を見つめるキャリア教育に取り組んだ。岩手県の沿岸部にある宮古市には、地元を知り、盛り立てる宮古商業高等

学校の生徒がいた。地域産業の低迷、若者たちの県外への流出…。こうした現状を抱える岩手県で、地域と働くことに真摯に向き合う高校生たちに出会った。

### 社会のこと、地域のこと、働くこと

### 何も知らなかったことに気づく生徒たち

- ◆◆生徒たちの地元就職志向
- ◆◆地域への愛着と反比例する
- ◆◆地元産業・企業への理解

岩手県では、高等学校の卒業後に就職する生徒の多くが、地元の企業を希望する。その背景には生徒たちの深い郷土愛と、地元に残ることを望む家族の思いがある。おのずと高まる生徒たちの地元志向。その一方で、生徒たちの地域産業や地元企業に対する理解は、深いとはいえない。現実に地

元就職を果たした生徒の中には、社会や仕事の厳しさ、働くことへのイメージとのギャップに戸惑い、辞める者も少なくない。

岩手県の南部に位置する一関市もまた、地元への就職志望者が多い地域の一つだ。市内で唯一、商業関係の学科を設置する大東高等学校では、将来の進路を見据え、興味関心のある職業で働く人にインタビューする活動や、二年時にはインターンシップを実施。こうした職業教育に注力しながらも、企業名だけで就職先を決めがちな生徒の

多さに心を砕いていた。

平成十九年度より同校で二クラスしかない「情報ビジネス科」に転任となった小山教諭。当初、このクラスで二歩踏み込んだ授業が出来ないかと悩んでいた。「この科の特徴を活かして、生徒たちにスポットを当てて何かはないだろうか。それに三年間クラス替えがない。希望して入学した生徒もいれば、成績によってこの科に入らざるを得なかった子もいる中で、仲間意識を高めた」。試行錯誤するうち、小山教諭はかつて六



年間、教壇に立っていた宮古商業高校でのキャリア教育を思い出した。企業や地域の大人に出会い、思いに触れて働くことを理解する「企業・地域の課題解決」カリキュラム。小山教諭は学校に情報ビジネス科一年生でのキャリア教育の実施を提案した。あれから半年。今日は授業の集大成であるプレゼンテーションの日だ。

- ◆◆自分の仕事に誇りを持ち
- ◆◆働く大人の姿は、生徒たちに
- ◆◆最後までやり抜く力を与えた

情報ビジネス科一年生の四十名が、一カ月ぶりに全員揃った。生徒たちは一人一人、思い出していたのかもしれない。訪問先にアポを取る時、声が震えたこと。企業訪問の前に全員で車座になって、挨拶やインタビューの練習をしたこと。地元を支える企業の人たちの仕事に対するひたむきな姿勢に胸が熱くなったこと。グループで準備をするうちに、仲間の優しさに気づいたこと。「自分たちの住む一関には、岩手県が誇る企業がたくさんあり、そこで働く人々は自分の仕事に誇りを持っている。これをみんなに伝えたい」。こうした生徒たちの素直な気持ちは、プレゼンテーションへの準備にも力を入れさせた。

「●●グループの発表の司会・進行を務めます○○です。よろしくお願ひします」。すべて生徒たちによって進められたプレゼンテーション。会場には発表を見ようと訪問企業の担当者から地域の人々、同じ情報ビジネス科の二年生まで、総勢約八十人が集まった。生徒たちはグループごとに、なぜ訪問企業に興味をもったのか、仕事内容、企業が抱える問題等を発表。ほっとしたのも束の間、質疑応答では「君たちなら、その企業の強みをどう活かそうと思えますか?」「なぜ、そこが問題点だと思ったの?」「発表することだけが目的じゃないよ!」と、ゲストから鋭い質問やコメントが飛ぶ。しどろもどろになりながらも自分の言葉で答え、最後までやり抜こうとする生徒たち。そんな姿を教室の後ろでじっと見つめていた小山教諭は、宮古商業高等学校の生徒の姿と重ね合わせていた。









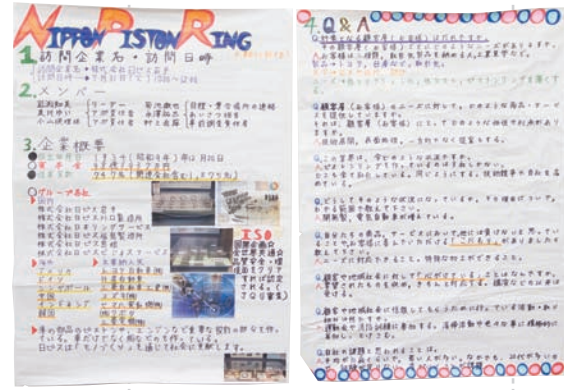
# 地元の現状を実感 キャリア教育 の足跡

生徒たちの自ら考え行動する力、そして地域への愛着は、成果物や授業で作られた何気ないものの中にしっかりと表れている。

## 発表の場と 学校行事を連動 企業訪問のまとめ

大東高等学校では夏休みを利用して企業訪問を実施。各企業でインタビューし

た内容をグループごとに用紙にまとめ、平成十九年度の文化祭でクラス展示をした。このように学校行事等を上手く活用して発表の場をもうけることで、生徒たちの授業に対する意識や、校内における情報ビジネス科への注目が高まった。



## 初めての経験に 手が震えた!

### 手書きのメモ

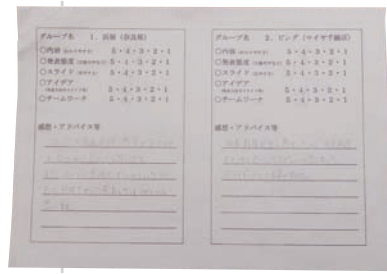
大東高等学校で行われたプレゼンテーションでは、発表から当日の司会進行まで、すべて生徒によって実施。ほとんどの生徒が大勢の人の前で話すことが初めてとあって、メモが手放せない発表となったが、生徒一人ひとりがグループ内での自分の役割を自覚。プレゼンテーション全体の進行を把握・意識している様子が、メモを持つ生徒たちの手から感じられた。



## 客観的な評価は、 将来の糧になる

### 感想用紙

プレゼンテーションの参加者全員に配布された感想用紙。グループごとに内容(わかりやすさ)・発表態度(目線や声の大きさ等)・スライド(見やすさ)・アイデア(解決策や発表方法等)・チームワークといった項目で5段階評価をする。さらに感想欄には、自分のグループと照らし合わせながら評価した仲間のコメント、また地域の人や上級生からの厳しくもあたたかい言葉が綴られていた。



## キャリア教育から生まれたもう1つの物語

# 子どもたちを地域で育てていく 郷土への愛着がエネルギー

大東高等学校・宮古商業高等学校ともに行われた『企業・地域の課題解決』授業。プレゼンテーションには、地元企業や地域の人々が多数詰めかけ、質疑応答にも積極的に参加。若手県全域の小中高等学校でキャリア教育を手がけるコーディネーターのNPO法人未来図書館は、生徒と地元を愛する大人たちとのあたたかなやりとりが「『岩手らしさ』なのでは」と語る。



地域がもともと持っている郷土と子どもたちへの愛情

大東高等学校のプレゼンテーションには、保護者、企業の担当者、青年会議所、NPO、地域の人々など、忙しいスケジュールの合間をぬって数多くの大人が駆けつけた。中には、自宅近所に住む生徒がプレゼンテーションで立派に発表する姿に、企業担当者の一人が、胸を熱くする場面も見られた。子どもたちの成長を支える人々の存在は一関市だけではなく、宮古市も同様だ。今から四〜五年前。宮古商業高等学校は宮古市の市町村合併にともない、近隣学校との統廃合の危機にさらされた。その時、いち早く立ち上がったのが地域住民だった。「『こない学校なくさないで』。地域の人々は自ら署名活動と反対運動を実施。これまで行ってきた『宮商デパート』活動をはじめとする学校の取り組みが、統廃合反対の切り札となり、学校は地域によって守られた。

キャリア教育はきっかけ  
コーディネーターは気持ちをつなぐ

郷土を盛り立てていくには、企業や地域の活性化と同時に、それらを創り、支えていく若者の育成が課題であることは、誰もが思っている。キャリア教育がきっかけは、「子どもたちの成長に関わるきっかけ」と、「地域の人々が具体的に担える役割」。人々は自ら子どもたちに関わることで、確かに育っていくという実感を得て、キャリア教育を自ら広げていく主体者となる。

岩手のキャリア教育の推進を担ったコーディネーターのNPO法人未来図書館は、「キャリア教育を地域で広げていくまでには確かに様々な苦労があったが、もともと『地域がもっていた郷土と子どもたちへの愛情』なくしては、ここまで広がらなかった」と言う。コーディネーターの役割とは、気持ちに火をつけ、つないでいくことではない。NPO法人未来図書館は現在、教育界と産業界の人々が教育について語り合う「キャリア教育を考える会」を定期的に主催したり、盛岡市で年一回の「キャリア教育成果発表会」を開催し、県内の高校を集めて、2年間の成果を発表する舞台づくりをしたり、と地域の人々にきっかけをつくり、新たな役割をつくっている。

岩手県のキャリア教育は、人から人、地域から地域へ、地元と子どもへの愛情をエネルギーにますます広がっていくだろう。

## 自分たちの解決策が 際立つ資料づくり

### プレゼンテーション資料

3年間、キャリア教育を実施している宮古商業高等学校では、パワーポイントによるプレゼンテーションの資料作成もお手のもの。どのグループも授業の目的、ターゲットをしっかりと踏まえた上で、地域を思う高校生らしい解決策を提示している。また資料全体の色づかいや文字の大きさ、写真の使い方等も「見る人」を意識しながら作成した様子が垣間見える。





## 教師・保護者・支援者の声

保護者として自分の子どもはもちろん、近所の子たちが地域や地元の会社のことをどのように見ているのか、そして将来に対してどんな風に考えているのかを知りたくて発表会に来ました。親としては、最終的に子どもたちが自分の力でメシが食えるようになってもらうことが願い。授業を通じて、子どもたちが仕事や社会に対して、意識が向き始めていることを感じられて良かったです。  
(保護者)

発表内容を聞き、生徒たちが企業における「信用」がいかに大切なものを理解していたことを感じました。そして今回の企業訪問が、各生徒の将来における「宝物」となったのではないかと思います。  
(ジョブカフェ：サポーター)

それぞれ見学した企業の特徴を掴んで、分かりやすく資料を作成・発表していたと思います。今回の発表で終わりにするのではなく、残り2年間の高校生活の中で、継続して会社のこと、地域のことを追求していけると良いと思います。今後、生徒の皆さんがどういう取り組みをしていくかが楽しみです。  
(授業協力企業：担当者)

大東高等学校、宮古商業高等学校ともに、生徒の発表姿勢はとても立派でした。そして、生徒がいかに頑張ってきたのかが伝わり、プログラムの持つ意義や、コーディネーターとして関わる意味、地域の方々へ向けて発表の場を持つ意味などを再確認できました。  
(コーディネーター：恒川かおりさん)

地元に住んでいても宮古市の産業を知らない生徒が多いのが現状です。小中学校で地域に関する勉強をしていますが、高校ではさらに深掘りして学んでいく必要があると感じています。今後は生徒と社会とをつなぐ「パイプ役」を担っていきたいと思います。  
(宮古商業高等学校：中元教諭)

## 子どもたちの声

高等学校を中心に行われた「地域・企業の課題解決」カリキュラム。生徒たちは実際に企業や地域が抱える問題を聞き、現状を見つめたことで、社会とのつながりを実感できたようだ。

消費者の減少、商品の売れ残りといった企業が抱えている問題は、少子高齢化や過疎化などの社会問題と直結していることを、企業訪問を通して感じました。  
(高校1年)

生産能力が上がれば、給料は上がる。能力が落ちれば、給料は下がる…。企業訪問によって、仕事や社会の厳しさを知りました。今回訪問した建設会社は、失敗が許されない仕事ばかり。職場では従業員の人が常に緊張感を持ちながら、仕事をしていることを学びました。  
(高校1年)

僕たち情報ビジネス科の2年生をはじめ、訪問した企業の人、地域の人々など、総勢80人近い人の前で発表した1年生は、2年生の自分でもなかなかできることではないので、発表を聞いて素直にスゴいなと思った。  
(高校2年)

地元の企業がどんな仕事をしているのかよく分かった。また、自分の地域の職場だけでなく、違う所にも企業訪問に行ってみたいと思った。  
(高校1年)

宮古市についてこんなに深く考えたのは、この取り組みをして初めてのことだった。何気なく住んでいる宮古市の課題や訪問先のことも知れてよい経験になった。発表する難しさも知れたし、将来に役立つ活動だったなと思った。  
(高校3年)

1年生が企業訪問を通じて知った企業のさまざまな課題に対し、もっと自分たちの「視点」を際立たせて、深掘りしていけば、発表の中身が充実すると思った。  
(高校2年)

こうしたプレゼンテーションを通して、色々な面での宮古市の現状がわかりました。これから大人になる私たちが宮古市を支え、そして活性化させていかなければならないことをあらためて思い知らされました。せっかく良い解決策の提案がたくさん出たので、実行させていければ、よい宮古づくりができていけると思います。  
(高校3年)



# 授業実施スケジュール

## 授業内容

**step 1** 仕事や社会に対する意識を明確に持つ  
**イントロダクション**

まず、キャリア教育の目的とこれからの授業内容について説明。生徒たちに、より仕事や社会に対する意識を明確に持たせるため、職業のリストアップやライフプランの作成、発想力のトレーニングといった活動を行う。



**step 2** 企業訪問に向けての下準備  
**企業・組織の理解**

企業の活動や組織について、基本的な理解を深める。ひとつの企業の中にもさまざまな部署や仕事があることを知り、企業の仕組みを把握したところで、訪問企業を検討。希望の企業ごとに分かれてグループをつくる。グループ内で志望動機(なぜ訪問したいのか)を明らかにし、企業にアポイントメントを取る。

**step 3** コミュニケーションのとり方を学ぶ  
**インタビュー準備・ロールプレイング**

訪問する企業について、業務内容等の基本情報を調べ、質問事項をグループごとに検討する。また訪問時のマナーについて学んだり、インタビューのロールプレイングを行い、企業訪問に備える。

**step 4** 企業の活動や勤労の尊さを理解する  
**企業訪問・インタビュー**

グループごとに企業へインタビューに行く。企業の仕事内容や働く人の思いに触れ、働くことに対する理解を深める。インタビューでは出来る限り自分の言葉で話し、互いに相手の回答から質問を広げる等の「会話」を心がける。

**step 5** インタビューの内容を整理し、考察  
**現状分析・戦略の検討**

企業の業種、規模、業界動向、企業のおかれた現状や課題等、インタビューで得た情報を整理。グループごとに発表する。次に訪問企業の強みと弱みを分析。商品、サービス、企画、販売戦略等の観点から解決方法を検討する。

**step 6** 分かりやすく効果的に伝える方法を知る  
**プレゼンテーションの資料作成**

模造紙やパワーポイントを使用し、プレゼンテーションの資料をまとめる。作成前にプレゼンテーションの目的を伝え、「相手に伝えること」を意識してまとめることを学ぶ。資料や発表原稿ができたグループから本番を想定して練習。声の出し方や資料の見やすさ等をグループ内で検討し繰り返し行う。

**step 7** 企業や地域の課題解決案を発表  
**プレゼンテーション**

プレゼンテーションを通じ、自分の言葉で表現することを学び、人前で話す経験を積む。始める前に発表における注意、ゲストの紹介、評価シートの記入について説明。プレゼンテーションはグループごとに行い、質疑応答の時間をもうける。発表後には訪問企業の方や保護者、地域の方に感想をいただく。

**step 8** 気付きや学びを再確認  
**職業観へのふりかえり**

地域の方とのふれあい、働く人々の思いや姿勢など、これまでの授業で学んだことを確認する。仲間と協力・考案したこと、プレゼンテーション時に得た達成感等を全員で共有し、自分の将来にどのように活かしていくかという視点を持って各自まとめる。

「地域・企業の課題解決」をテーマにしたカリキュラムでは、「事前体験→事後」のサイクルで授業を実施。地域や企業を調査し、インタビューし、中間発表で指摘を受けて、改めて調査をする時に生徒たちは一番成長するそうだ。

## 授業実施ポイント

- 職業のリストアップ：思いづく限りの職業を付箋等に自由に書かせ、職業の多様なことに興味を喚起。記入した仕事はどのような内容か、分からない仕事はどういうものか、なぜその仕事に興味があるのか等を発表し合い、職業についての理解を深めさせる。
- ライフプランの作成：幼少期から今までの自分をふりかえさせる。自分の良い点を十個書き出させ、自己肯定感や将来への前向きな気持ちを持たせる。さらに十年後、二十年後の自分をイメージさせる。
- 発想力のトレーニング：「みんなはプロデューサー。先生を売り込むキャッチコピーを考えよう」といった状況設定と課題を提示。固定観念にとらわれず、自由に発想させる。

事前準備すること 紙、付箋、サインペン、ライフプランシート、記入シート等

- 企業の活動や組織の説明では、生徒たちにとってなじみのある企業等を例にとり理解しやすい。
- あらかじめ興味のある企業を覚えておくように指導。
- 企業へのアポイントメントは授業時間外に取らせるようにする。
- 必要に応じて、アポイントメントを取るためのロールプレイングを行う。

事前準備すること 訪問先の検討がしやすいよう、地元企業の監や電話帳を用意。

- 質問内容の検討では、今後の授業で企業分析や解決法の提案を行うことを踏まえさせると、目的意識を持って取り組みやすくなる。
- ロールプレイングでは企業側の立場に立った視点も持たせる。

- 訪問時の身だしなみ、持ち物(訪問先の地図、交通手段、交通費、質問の書かれたシート)、企業の担当者名と役職を再度確認させる。
- 企業にとって貴重な時間を割いて協力してもらっていることを伝え、必ず時間を守らせる。
- 各自役割を持つよう指導し、全員がインタビューに関われるようにする。

事前準備すること 初めに訪問する企業の場合、教師が事前に電話や訪問する等して挨拶を。授業の趣旨や今後の流れを説明し、協力をあおぐ。

- 発表させることで、グループ内外での視点の違いに気づかせる。また他者に伝える上で重要な「表現力」を養う。
- 分析活動では質問の回答だけでなく、企業担当者の話しぶりや何気ないコメントにも、解決策が隠れていることに気づかせる。
- 解決方法の検討では、まず自由にアイデアを出し合わせてから目的やターゲットを絞り込み、方法をまとめさせる。教師はグループで協力し合う「体制づくり」も行う。

- 発表する相手や場所、発表時間、使用できるツールや機材等を明確に示し、生徒の緊張感を高める。
- 資料作成にあたり、ひとりひとりがグループ内の役割を果たし、協力することの重要性を認識させる。また練習を通して、生徒たちに自信を持って本番に取り組みよう促す。

- 自分と他のグループとの発表方法・態度の違い等を評価シートに記入させる。評価シートは生徒だけでなく、ゲストにも配布。記入してもらう。

事前準備すること

協力いただいた企業の方や保護者、地域の方々にプレゼンテーションの案内をする。同時にプレゼンテーションを行うための場所(多目的ルームや体育館等)を確保。  
当日の主な準備物：他者自己評価シート、プレゼンテーション用資料、各グループ、プロジェクター、マイク等



- 企業へのインタビュー体験や分析、課題解決提案を通しての気づきや、仕事をする上での大切な姿勢について再確認させる。
- 事前学習で記入したライフプランシートと比較しながら作文を書かせると、自己の職業観へのふりかえりがしやすい。

「イハト・ブルネッサンス」企業戦略体験型職業観創生プロジェクト「授業実践のための手引き 今すぐ実践! 地域で学ぶキャリア教育 ― 社会人のタネの育て方 ―」より引用

発行・委託 NPO法人未来図書館

事後学習 [約3時間]

体験学習 [約18時間]

事前学習 [約5時間]



# 学校・産業界・地域による 一体的なキャリア教育の推進

## 地域自律・民間活用型 キャリア教育 プロジェクト

経済産業省では、平成十七年度から三年間、子どもたちに対して、ものづくり等を通じて働くことの面白さの体験・理解を促し、職業観の醸成を図るため、「地域自律・民間活用型キャリア教育プロジェクト」を実施してきました。

地域に密着したキャリア教育を推進していくためには多くの課題があります。

まず第一に、学校の先生は非常に多忙であること。特に日中は、授業だけでなくお昼休みや部活動の時間がさえも、児童・生徒との関わりが必要になるため、企業や地域へアプローチすることは容易ではありません。

第二に、企業は学校のこと

からないこと。近年では、地域貢献やCSRの観点から、学校教育等への協力を積極的に行いたいと考えているのですが、そのやり方や先生・学校が何を求めているのかを知る機会がないのです。同様に、学校の側も企業の考えを知る機会

が少ないこと。近年では、地域貢献やCSRの観点から、学校教育等への協力を積極的に行いたいと考えているのですが、そのやり方や先生・学校が何を求めているのかを知る機会がないのです。同様に、学校の側も企業の考えを知る機会

## 平成十九年度は 全国二十八地域で モデル事業を実施

これらの課題に対応し、子どもたちだけでなく、親、学校、産業界等の地域の関係者すべてが一体となってキャリア教育に参加していくためには、これらの関係者をつなぐ「架け橋」的な存在が必要です。

経済産業省では、この「架け橋」的な存在を「民間コーディネーター」として支援することを通じて、地域関係者間で「顔の見えるネットワーク」を構築するとともに、民間のアイデアを活かして、一過性ではない「体系的・効果的なプログラム

経済産業省では、平成二十年度以降、地域で自立のかつ継続的にキャリア教育が実施されることを目指し、平成十九年度は、全国二十八のNPO法人や企業等を「民間コーディネーター」として選定し、モデル事業を展開してきました。

この三年間で、この「民間コーディネーター」が有する独自のノウハウ・アイデアを有効に活用した様々なキャリア教育が実施されてきました。それぞれの地域で

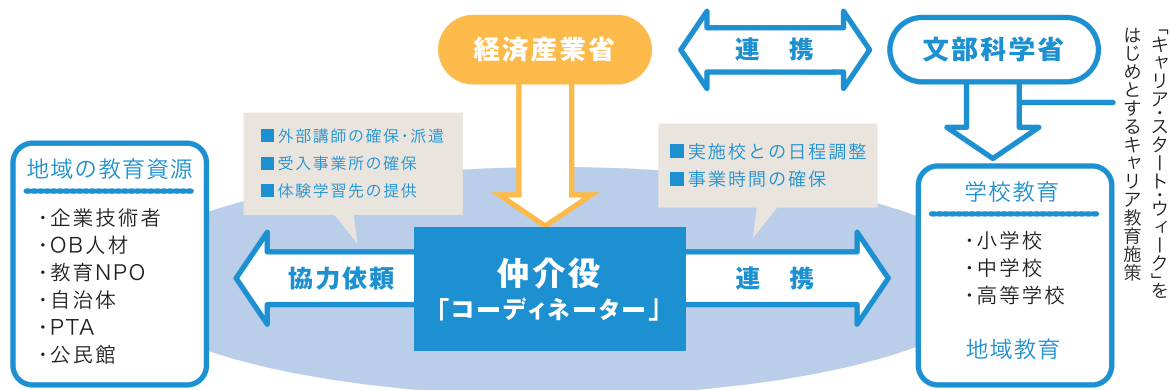
この三年間で、この「民間コーディネーター」が有する独自のノウハウ・アイデアを有効に活用した様々なキャリア教育が実施されてきました。それぞれの地域で

## コラム

### 漁師が山に登って木を植える理由

15年ほど前から、海の漁師が山に登り、木を植える運動が全国で再び活発化しています。漁師がなぜ、山に登って木を植えるのでしょうか。漁師達は江戸時代より、長年の勤から海と山が繋がっていたことを知っており漁師の植林も盛んでした。木はやがて豊かな森になり、豊かな森は豊かな水を蓄え、豊かな水は豊かな川を育み、豊かな川は豊かな海を育む。漁師が何十年も先に漁を続けていくために、豊かな森づくりに取り組むということなのです。木を植えた効果が見えるのは50年後かもしれないけれども、漁師という仕事を続けていくために大事なことは長期的に取り組むということです。経済産業省や企業が教育に関わる理由も同じ視点にたっていると云えます。

は、地域一体となつて教育に参画していく機運が着実に根つき始めています。



〈平成19年度実施地域・団体〉

北海道札幌市 (キャリアバンク (株))  
Sapporo夢探究プロジェクト

富山県富山市 ((社) 富山県経営者協会)  
キッズわくわくワーク塾～現代の売薬さんになってみよう!～

北海道小樽市 (NPO法人北海道職人義塾中学校)  
小樽市の産業資産を活用したキャリア教育事業

京都府京都市 ((財) 京都高度技術研究所)  
「伝統と先進の共生」プロフェッショナル探究型キャリア教育

岩手県盛岡市、等 (NPO法人未来図書館)  
イーハトーブ・ルネッサンス  
～企業戦略体験型職業観創生プロジェクト～

和歌山県田辺市 (オフィスメイト (株))  
紀州「ほんまもん仕事人」育成プログラム

秋田県大館市 (NPO法人ひととくらしとまち大館ネットワーク)  
おおだて子ども未来づくりプロジェクト

大阪府大阪市 (NPO法人日本教育開発協会(JAE))  
ドリカムスクール～Academic～

宮城県仙台市 (ハリウコミュニケーションズ (株))  
学社融合型キャリア教育プログラム

大阪府堺市 (NPO法人南大阪地域大学コンソーシアム)  
ものづくりのまち堺から発信する「こんなモノ欲しかってん!」

茨城県つくば市 ((有) つくばインキュベーションラボ)  
つくば市キャリアパスポート事業

大阪府和泉市 ((有) マイトイ)  
「伝説が生んだ商品!歴史の町からいずみっこ」プロジェクト

東京都23区 ((株) ソシオエンジン・アソシエイツ)  
情報コミュニケーション産業人材育成のための中学生向け教育プログラム「Communication Pro School (CPS)」

兵庫県明石市、等 ((株) キャリアリンク)  
産業界をテーマにしたプロジェクト型学習モデルプラン構築事業

東京都三鷹市 (NPO法人三鷹ネットワーク大学推進機構)  
アニメーション・コンテンツ産業を素材とした、小・中学生向けキャリア教育プログラム『クリエイティブ・キャリア・プログラム』

広島県三次市 ((株) ウィル・シード)  
学校現場と三次市産業界の連携を基盤とした全小学校・中学校実施による体系的キャリア教育

千葉県 (NPO法人企業教育研究会)  
企業と組み立てるキャリア教育  
～地域産業・研究機関との協働～プロジェクト

愛媛県大洲市 (NPO法人ベンチャー・アライアンス協会)  
大洲「ひと」「もの」「まち」づくり地域一体型キャリア教育プロジェクト

長野県諏訪市 (エプソンインテリジェンス (株))  
諏訪版キャリア教育「ユーザー視点のものづくり」

福岡県福岡市、粕屋郡 (NPO法人男女・子育て環境改善研究所)  
知りたいを形にする「中学生・高校生の視点から企画・取材・編集する職業ガイドブックづくり」事業

長野県長野市 (NPO法人キャリア・起業家教育学会)  
地域ブランドビジネスから日本経済・世界経済を見る・知る・考える

福岡県飯塚市 (レベルアップ (株))  
産学協働による「菓子づくり」と「IT」を活用した「ものづくり教育」実践プロジェクト

静岡県伊豆市、等 ((財) 静岡県生涯学習振興財団)  
全県普及・人材育成型 しずおかプロジェクト

佐賀県佐賀市、等 (NPO法人鳳雛塾)  
ケースメソッドを活用した一貫型ビジネス人材育成キャリア教育事業 (佐賀モデル)

愛知県瀬戸市 (瀬戸商工会議所)  
瀬戸まるっとキャリア教育～せとがまるっとセンセイになるとき～

沖縄県那覇市 ((有) オーシャン・トゥエンティワン)  
コストゼロを可能にする「なんで科コミュニケーション」と「ストーリーテリング」を基礎にした沖縄型カリキュラム

岐阜県羽島市 (羽島商工会議所)  
小中高一貫型キャリア教育推進事業

沖縄県名護市 (NPO法人金融知力普及協会)  
やんばる夢発見プロジェクト



MEMO



【発行・編集】  
経済産業省

【制作】  
平成19年度地域自律・民間活用型キャリア教育プロジェクト  
中核コーディネーター NPO法人アスクネット  
TEL(052)881-4349  
<http://www.ask-net.jp/>

【編集協力】  
株式会社ジオコス  
<http://www.jyocos.co.jp/>

